武蔵野とその文学

野村八良編

武藏野とその文學

東京　武藏野書院

アカコマヲ。
ヤマヌニハカシ。
トリカニテ。
タマノヨコヤマ。
カシユカヤラム。

武藏野とその文學

目次

第一篇　武藏野

一　武藏野の名稱及地域

二　歌謠に現れた武藏野

目次

三　紀行に現れた武藏野

四　餘　言

第二篇　隅田川

一　隅田川の水系及名稱

二　文學に現れた隅田川

第三篇　多摩川

一　多摩川の水系及名稱

二　文學に現れた多摩川

三　餘言

挿繪

目次終

陸や管に多摩の横山かすみあひて
武藏野廣く春に來にけり。

清水濱臣

武藏野とその文學

野村八良編

第一篇　武藏野

一　武藏野の名稱及び地域

詩材としての原野

詩歌の材料として或原野を捕捉して來る事は、山嶽河川等の場合と同樣、上世の民衆が夙に感興を有つた所である。試に萬葉集に就いて考へるに、鹿持雅澄が萬葉坐知佳境に擧げてゐる所に據ると、野と稱するもの七十二件、原と稱するもの二十三件の多きを算するのである。

さうして室町の季世、月村齋宗碩の藻鹽草に至ると、もはや武藏野に關する詠歌の資料の如きは、約束的に固定した觀を示してゐるのである

武藏野

按ずるに、武藏野とは、國の名をやがて野の名と呼んだことは勿論で、恰も相模野といふのと同類である。

武藏の國名

そこで勢、武藏と云ふ國名の意義の吟味が必要となる。

賀茂眞淵及び本居宣長の說

本居宣長の古事記傳卷七及び卷二十七を閲すると、賀茂眞淵及び本居宣長の說を窺ひ知ることが出來る。眞淵は、相模、武藏は元來一國で牟佐（ムサ）であるが、それを上下に分けて、牟佐上（ムサガミ）、牟佐下（ムサシモ）と云ひ、やがて其のムサガミはムを略いてサガミとし、ムサシモはモを略いてムサシとしたのであると說いてゐるのであるが、宣長は、眞淵と同じやうな說き方をして、駿河、相模、武藏の地は元は佐（サ）斯（シ）の國と云つたらしいが、二分して相模、武藏となり、駿河は後に又

相模から分れたと見てゐる。眞淵がムサであると云つたのを、此はサシであると異見を出したのである。さうして相模は佐斯上のシを省いたのであり、武藏（ムザシ）は身佐斯（ムザシ）の意であらう。其の身（ム）と云ふのは、主（ムネ）の意で、畢竟武藏は佐斯の國の内に主（ムネ）とある眞原（マハラ）の地であるから、かやうに名づけたのであらうと說いてゐるのである。此も眞淵と違ふ點である。又宣長は古來用ゐた牟邪志（ムザシ）、武藏の字面から考へて、ムサシのサは濁音でなくてはならぬと云ふことも說いてゐる。併し此は平安朝の頭には、淸（ス）んでムサシと稱へてゐたことは、和名類聚鈔に牟佐之とあるのでも分る。とにかく眞淵が相模、武藏は元來一國でムサであると云ひ、宣長がそれを又考へ直して、サシであると云つたのは、共に推測であつて、洵に信用し難い。殊に此の古名サシ說は、古事記（景行

天皇段）の弟橘比賣命の「佐泥佐斯。佐賀牟能袁怒邇。」云々の御歌のサネサシが論據で、サネサシが相模の枕詞であるといふ考から來たのである。併し此の用語例は此の一首の外絶無の觀があつて、內山眞龍の如きは、古事記謠歌註に、此はサネサネシの下のネが脫落したので小寢々々しの意であらうといふ異說さへも出してゐる位であるから、頗る薄弱な說である。蓋しムサシの名は夙く既に存してゐたのであらう。例へば上總國に元、武射と云ふ郡があつた。（今は山武郡となつてゐる。）此ういふ名も本來關係があつたのではなからうか。

武藏は當字である

偖、武藏の二字は、音を假借した當字である。さうして此の二字だけでは、ムザであつて、シの音は表されてゐない。此は清水濱臣が答問雜稿に云つてゐるやうに、和銅六年の詔に、「諸國郡郷名著二好字一」

とあり、又延喜式に、「諸國部内郡里等名。並用二二字一。必取二嘉名一。」などとあつて、此も最終の一字を省いた爲であらう。處が、此の武藏と云ふ字面に據つて、日本武尊が武器を秩父岩倉山にお藏めになつたと云ふ故事を云々することが起つた。江戸名所記や和漢三才圖會や江戸名所圖會等いづれも之を載せてゐる。試に一例として淺井了意の江戸名所記の文を出して見よう。

さても此國を武藏と名づけし事は、いか成故かあるらんといふに、あるじのおきなこたへていはく、古き人の物がたりに、この國のうちに、祖父(オホヂ)が嵩(タケ)とてたかき山あり。その山の有さま、鎧武者の大にいかつて立たるかたちに似たり。されば人王十二代景行天皇の御宇に、日本武尊東夷をしづめんためとて、この國にくだり給

ひ、かの嵩を見そなはしての給はく、此山のいきをひによりて、此國の人はこゝろのたけき事、餘國にすぐれたるもことはりなり。我今大將軍として、東夷のともがら王命にそむくものを責したがへんがためにくだれり。ねがはくは此嵩の神わが軍をまもるべしとて、みづから所持の武具を嵩のうへなる岩藏にこめて、山神をまつり給ふ。武具をこめし岩藏の國なれば、文字に武藏と書たり。さてほどなくたいらかに國中おさまりければ、今ははや武者武具をさしをくなりとのたまひしより、むさしの國とは名づけたり。

（下略）

民間語源說

即ち所謂民間語源說（フォルクスエティモロギー）で、傳會の言、採るを得ないものである。其の他此の類の俗說の首肯し難いものが、大橋方長の武藏演露に殆ど網羅し

てあるから、好事の人は、就いて見られたらよからう。

ムサシの語源に就いての私見

ムサシの語源に就いては、私見がある。抑〻故吉田東伍氏は其の大著地名辭書に、舊說を信憑せずして、それは古夷語に基づいたものであらうと疑はれた。そこで予はムサシ特にムサの如き語は、到底固有の國語で解釋の附くものではないと決心して、バチェラー氏のアイヌ

アイヌ語のムセ等

語辭典を調べて見ると、ムセ(Muse) モサ(Mosa) モセ(Mose) モウセ(Mouse) 等の語があつて、何れも、蕁麻(イラクサ)の義があることが分つたのである。さうすると次には、カラムシ(苧)といふ語が思ひ浮ぶ。唐(カラ)といふ舶來物を意味する語を除いたムシはとなると、アイヌ語のムセやモサ等と偶然一致するやうにもあるので、又日本外來語辭典の如きで調

朝鮮語のモシ

べて見ると、此は朝鮮語の Mosi(苧) の轉訛らしい。それからカラムシ

を唯ムシとのみ使つた例は無からうかと考へて行くと、古事記上卷の須勢理毘賣の詠に、「牟斯夫須麻。爾古夜賀斯多爾。」のムシブスマが頭に浮ぶ。處が契沖阿闍梨の厚顏抄も、本居宣長の古事記傳も、內山眞龍の古事記謠歌註も、此のムシブスマを蒸衾として、ムシを溫暖な意としてゐる（萬葉集卷四にも「烝被。奈胡也我下丹。」の例がある。）併し其の意味では、次に來る「多久夫須麻。佐夜具賀斯多爾。」の栲衾に相對する語とならぬ。被の形容は兩者各〻柔、淸の語が副うてゐるから、栲衾に比べては、ムシブスマのムシも、名詞でなくては不調和である。さすがに橘守部だけは、さういふ點に心附いて、稜威言別に之を蟲被で、繭の絹の衾であらうとの說を立てゝゐる。併し未だし、予は苧衾でなくてはなるまいと考へ附いたのである。アイヌ語で蕁麻の

山海名產圖會

意、朝鮮語で苧の意の語が、とにかくムサシ（武藏）に含まれてゐるであらう。而も次節に出す如く、萬葉集の東歌に、「多麻河泊爾。佐良須氐豆久利。云々」とある、其のテヅクリ（調布）は、和名類聚抄に白糸布とあり、又同書に紵布をアサヌノと訓んでゐるが、紵は說文に、「檾屬。細者爲レ絟。粗者爲レ紵。」とあつて、檾は枲の類である。多摩川附近に苧を產し、隨つて粗布を織出したもので、さういふやうな因緣から國名に附いたのであらう。山海名產圖會（蔀關月書）卷五に、越後縮の事を言つてゐる條に、此ういふ面白い記事がある。

越後連接の國信濃をはじめ、武藏、下總、下野、常陸など、皆古苧麻の多く生せし地なれば、國の名をもそれによりて號くる物、下總、上總、信濃なり。上總、下總は元フサの國といひて、即ち

フサ、アサの轉語なり。又麻をシナといふは、東國の方言にて、今も尙然り。蝦夷人の帯をシナと云木の皮にて作ると云ふも是なり。信濃はシナヌノと云ことにて、專織出せし地なるべし。

古語拾遺

此は武藏の語源を明言してゐないが、予の考の前驅をしてゐる氣のするものである。尙古い資料に溯つて、武總の地と麻屬との關係を繹ねると、古語拾遺の、顯著な記事は、第一に思ひ及ぶ所である。卽ち天富命が日鷲命の孫（スヱ）を率ゐ、阿波國に穀（ユフ）、麻（アサ）を殖（ウ）ゑ、更に天富命が阿波の忌部を分ち、東土に率（キ）て往きて又此を殖ゑしめた。麻の生ふる所を總（フサ）（アサの古語フサ）の國と謂ひ、穀（ユフ）の生ふる所を結城（ユフキ）の郡と云ふ、阿波忌部の居る所を安房の郡と名づくとある。それから又延喜式（卷二十三民部）を見るに、年料別貢雜物に、武藏國（麻子六斗）下總國（麻子七斗）とあり、同書（卷二十四主計）

に、中男作物として、武藏國麻五百斤、上總國麻二百斤、下總國麻四百斤とある。凡そ武總の地が、古代から麻の類の植物に適してゐた事が、此等の資料で明示せられてゐると思ふ。推考すると、元來此の地方には、麻や苧の野生の物も、多かつたであらう。随つて阿波の忌部も其の繁殖に適ふとして、一層植ゑ弘めたものであらう。

鳥居龍藏氏の說

以上は先年予が舊著に縷述した所である。此の武藏語源私考は、其の後尠からぬ反響があつた。即ち批評を加へられた中の尤なる者は、鳥居龍藏氏である。予の著述を讀まれた同氏は、淺草の傳法院で開催せられた武藏野會の席上で、武藏名義考を講演せられ、予の說に多大な賛意を表せられ、重ねて苧の事、殊に朝鮮に於ける紵布の話を詳細に述べられたのである。而してムサシにアイヌ語のムセ、モサ等、就

中朝鮮語のモシを含有すると云ふは可として、ムサシのシの意義は子即ち種子の義であらう、卽ち苧の種子のある所、其の有名な産地と云ふ意味であらうと云ふ事を併せて補説せられたのであつた。此の講演の要旨は、武藏野誌上にも載せてあり、又其の後大正十三年に同氏の上梓せられた武藏野及其周圍にも收めてある。予は同氏の好意に對し、永く感謝の意を抱くと共に、予の論じ足りなかつた點に就いて、推究を怠るまいと心に誓つてゐた。

麻布といふ地名

一體東京の麻布は、古、麻生とも書いて、麻の多く生じた故の名であるといふことは、旣に新編武藏風土記稿に見えてゐる所であつて、此はいつも予の念頭に懸つてゐる　麻生といふ地名は方々に其の例を見出すに難くない事も能く知つてゐる。又信濃には蟲生（ムシフ）といふ面白い

地名さへもある。此の蟲は下の生（フ）といふ語との釣合から考へると、苧（ムシ）生（フ）の義に相違無からう。故に此う順々に思ひ廻らして來ると、ムサシのシに意義が有るとすれば、どうも國語の生（フ）に當るやうな意味ではなからうか、種子といふ鳥居氏の新説はどうであらうと、首を傾ける事が度々であつた。

近年の事である、永田方正氏の著で、北海道廳の藏版である北海道蝦夷語地名解（明治四十一年再版）を繙いてゐると、石狩國雨龍（ウリウ）川筋の地名に、

Mose ushi　モセウシ　蕁麻アル處

といふのがあり、又同國石狩川左の地名にも、

O mose ushi　オモセウシ　蕁麻多キ處

といふのがある。尙同書には、何々のある處といふ意で、ウシを終に帶びた地名はいろ〳〵出てゐる。

Kina ushi　キナウシ　蒲多キ處

Setani ushi　セタニウシ　山梨アル處

Tatni ushi　タツニウシ　樺アル處

Hu mun ushi　フムンウシ　生草多キ處

の類である。バチェラー氏の辭典に、

Ushike　ウシケ　場處　Place

とあるのも、同類語として倂せ考へられるのである。是に由つて、ムサシはアイヌ語のモセウシ或はモサウシの如きが、約まり轉じた語であらうといふのが、唯今迄の予の推定である。此の追考は中央史壇の

大正十一年十二月號で發表した所である。

次に野の語義を辨じようと思ふ。新井白石の東雅には、野は伸る義があるとして、平遠曠濶の意に解してゐる。(狩谷棭齋も其の和名抄箋注に此の說を採つてゐるのである。)處が本居宣長は古事記傳に、野は古語ヌで、沼の意であらうと解してゐる。即ち卑濕の地を指したのである。共に參考には値するけれども、未だ遽に從ひ難いやうである。上田萬年氏の談に、篠(シヌ・シノ)を廣義に見て草叢の意とし、やがて其の生ふる所をヌ・ノと云ふのではなからうか、又弖爾乎波の「の」「に」の如きは、或範圍を限つての所屬の意を示したものである。此等は皆野と云ふ語と相通じる所があるやうに思はれるとの事である。此の說も亦參考に資さなくてはならぬ。因みに、本居宣長は篠を志怒と

云ふのは、細い竹を始として、薄や葦などにも云ひ、（しのすゝき、あしのしのや等の如く、）かういふ類の總名であるのを、專ら小竹、細竹などと書くのは、主たる物に就いてゞある。シヌの意は、なよやかに靡ふ由であると說いてゐる。又原は、平、廣、張る、開く等と關係のある同一語源の語であると思はれる。日本外來語辭典を繙くと、野も原も、朝鮮語やアイヌ語と、音韻上の共通點の存するのは、興味の有ることとである。

武藏野の地域

偖次には、古今の人々の觀た武藏野の地域に就いて、一往紹介して置かうと考へる。

半日閑話

太田南畝の半日閑話に、俗に武州江城西に當り、中野といふ所、其の近所に原がある。是を武藏野と號すると云ふのを駁して、武藏野と

丙辰紀行

いふのは、今江戸のあたり、南北西に限つて、皆武藏野といふと辨じてゐるのは、勿論至當であつて、決して一小局部を提へてさう言ふのではない。武藏野を辨して正鵠を得てゐるのは、先づ林羅山の丙辰紀行(此は元和二年京上りの紀行である。續群書類從に收められてゐる)を推さなければならぬ。其の冒頭に武藏野と題して、

昔に負ふ武藏野は、月の入るべき山(山の名)もなしといへば、まことにそこばくの萱萃のすぎて久木萃たり 此國の稲毛、葛西、越谷、岩槻、河越、鴻巣、忍なども皆武藏野の内にて侍る。いづれも御獵場なれば、毎年爰に成らせ給ふ。

江戸名所圖會

と記してゐる。又江戸名所圖會にも、更に詳に記して、

南は多摩郡、北は荒川、東は隅田川、西は大嶽秩父根を限として、

多磨、橘樹（タチバナ）、都筑、荏原、豊島、足立、新座（ニヒクラ）、高麗（コマ）、比企、入間等すべて十郡に跨る。草より出でゝ草に入る、又草の枕に旅寢の口數を忘れ、問ふべき里の遙なりなど、代々の歌人袂をしぼりしが、御入國の頃より、昔に引きかへ、十萬戸の炊煙、紫霞と共に棚引き、僅に其の舊跡の殘りたりしも、承應より享保に至り、四度迄新田開發ありて、耕田林園となり、往古の風光これなし。されど月夜狹山（サヤマ）に登りて、四隣を顧望するときは、曠野蒼茫、千里無限、往古の狀を想像するに足れり。

とある。さうして又新編武藏風土記稿の多磨郡の條には、特に、

新編武藏風土記稿

其野ヲスベテイハヾ、十郡ニワタリシナドイヘバ、廣大ノコトナリ。其内ニモ當郡ニアル原野ハ他郡ヨリコトニ廣キコトハ論ナシ。

とも書いてある。これと同じやうな趣は、津村淙庵の譚海卷五にも見えてゐる。即ち、

又川越より八王子へゆく間三四里、曠野にして武藏野といひつたふ。是は誠に人家もなく、昔のまゝなるものとおもはるゝとぞ。

とあるのである。

武藏野開墾

序に述べると、武藏野開墾の事を江戸名所圖會に言つてゐるが、それは記録に所見があつて、實は承應以前に既に其の事があつたのである。

吾妻鏡

吾妻鏡卷十八に、「建永二年〔承元元年〕三月壬辰。武藏國荒野等。可レ令ニ開發一之由。可レ相ニ觸地頭等一之趣。被レ仰ニ武州一云々。廣元朝臣奉ニ行之一云々。」とあるのは注意すべき事實である。尙武藏野開田評定の事は、同書卷卅四に、「仁治二年十月二十二日丙子。以ニ武藏野一可レ被レ

開二水田一之由。議定訖。就レ之。可レ被レ懸二上多摩河水一之間。可レ爲二犯土之儀一歟。將又將軍家御沙汰歟。可レ爲二私計一歟。賢慮猶難レ被二一決一。仍今日。前武州召二陰陽師泰貞一。晴賢等朝臣一被二示合一云々。」とあるので知られる。卽ち多摩の流を灌漑に用ゐた樣子が分る。又享保度の新田の事の如きは、新編武藏風土記稿多摩郡の條下に委しく見えてゐるから、宜しく參照せられたい。

尙飜つて、故邨岡良弼氏の日本地理志料卷十六に、武藏の地勢を說いて、

日本地理志料

按本州。東至二下總一。南臨二東京灣一連二相模一。西至二甲斐信濃一。北至二上野下野一。利根川繞二北境一。江戶川限二東方一。山脈西來。爲二秩父多摩諸山一。地勢隨レ東闢二于南北一。平濶數十里。大逵四達。人煙

相處。其東南隅爲二東京一。皆古之武藏野地也。

と言ひ及んでゐるのは、武藏國の平野即ち武藏野であるとの謂に外ならないのである。又故吉田東伍氏の大日本地名辭書には、舊說を綜合して、此う言つてある。

大日本地名辭書

地理上より其の形勢を推せば、南方相模野に隣り、北方利根川に至り、西堺は秩父、甲斐に連なれる高峯峻嶺を仰ぎ、東は江河(利根の諸派)及び海灣を以て相限ると謂ふべき歟。されど是利根水系、坂東平野の一部を指したるにて、本來の大形勢より云へば、八州平野の最廣なを擧げて、特に武藏野といへるなり。故に古今遊覽登臨の人は、往々武藏野の廣大なるを感興するに、坂東平野全域と同一にして相分つなきことあり。而も狹く取れば、府中、河

廣狹二樣の解釋

越の間、卽ち江戸の西北部に連なれる地、最も平曠莽蒼なりければ、特に指して武藏野と呼ばれ、近世に至るまで、田宅多からず。今や墾破力を餘さずと云ふと雖も、多摩、入間の郡中に、空閑林叢、彷彿として上古草茫の景狀を呈する地あり。

と廣狹二義に解したのである。此の種の解釋は旣に江間氏親の遊囊賸記（古事類苑地部所引）の如きに、之を爲してゐる所であるが、とにかく其の說は極めて穩當であると言はなければならぬ。

尙武藏野の通路の事等は、後節に於て、おのづから說き及す所があらう。

二　歌謠に現れた武藏野

以下韻文と散文との兩方面から觀ようと思ふ。

萬葉集の東歌

多摩川
武藏野

古事記及び日本書紀の歌謠には、武藏野の事は見えてゐない。先づ萬葉集卷十四東歌の内に、武藏國歌が九首あることは注目しなければならぬ。〔主として萬葉集古義に據り、註を加へて示す。〕

多麻河泊爾。左良須氐豆久利。佐良左良爾。奈仁曾許能兒乃。己許太可奈之伎。〔多摩川に晒す手作(此までは序の詞)更に〳〵何故に此の女のそこばく戀ひしいことであらうぞの意。〕

武藏野爾。宇良徹可多也伎。麻左氐爾毛。乃良奴伎美我名。宇良爾低爾家里。〔武藏野の鹿の肩骨を灼いて占ふ占に、眞實にも名のらぬ君が名は占にあらはれ出たといふ意。〕

武藏野乃。乎具奇我吉藝志。多知和可禮。伊爾之與比欲利。世呂

爾安波奈布與〔武藏野の小岫が雉(此迄は序)立別れ、去にし宵から我が夫に逢はない事であるよの意。〕古非思家波、素氐毛布良武乎。牟射志野乃。宇家良我波奈乃。伊呂爾豆奈由米。〔戀ひしくあるならば、袖をも振つて慰めように、武藏野の朮が花の(色といふ詞を起す)色にゆめ〳〵出るなの意で、男の歌である〕

武藏野乃。久佐波母呂武吉。可毛可久母。伎美我麻爾末爾。吾者余利爾思乎。〔武藏野の草葉諸向(此迄は序)彼にも此くにも君がまにまに吾は身を寄せ依つたものを、今更何の水臭い事があらうといふ意。〕

伊利麻治(入間路)

伊利麻治能。於保屋我波良能。伊波爲都良。比可婆奴流奴流。和爾奈左要曾禰〔入間路の大家が原のいはゐづら(植物の名、後に記す。)を引けばぬる〳〵と靡き依るやうに、いつまでも吾に仲絕えるなと云ふ意。〕

和我世故乎。安杼可母伊波武。牟射志野乃。宇家良我波奈乃。登吉奈伎母能乎〔吾が夫を何とか云はう、武藏野の朮が花の(序)時なく常に戀ひしいものをの意。〕

佐吉多萬
（埼玉）

佐吉多萬能。津爾乎波布禰乃。可是乎伊多美。都奈波多由登毛。許登奈多延曾禰。〔埼玉の津に泊り居る舟の風の强さに綱は斷れ絶えても、吾が言問ふ間柄の絶えないやうにの意。〕奈都蘇妣久。宇奈比乎左之氐。等夫登利乃。伊多良武等曾與。阿我之多波倍思〔なつそびく、（枕詞）うなひ（地名）を指して飛ぶ鳥の、（此迄は序）至らうと思つてぞ吾が忍び／＼に逢つたのであるの意。〕

朮が花

此等は何れも抒情の歌である。右の内第二、第三、第四、第五、第七の五首は、武藏野を詠み込んでゐる。其の他のにも、多摩川、入間路の大家が原、埼玉の津等の地名が見えてゐるのは、注意しなければならぬ。さうして武藏野に關して、鹿の肩骨を灼いて占ふ事や、小岫が雉や、朮が花などを詠じてゐるのは、古俗の一端も窺ひ知られ、又極めて野趣の掬すべき點もある。就中、朮が花を配する事は、後世迄かなり影響してゐる。寺島良安の和漢三才圖會（山草類）には、白朮を一をけ

ら」と訓し、其の藥用を說いてゐる。鹿持雅澄の萬葉集品物解卷一には、次の如く見えてゐる。



朮（牧野富太郎氏標本）

和名抄に、爾雅註ニ云。朮ハ似レ薊ニ生ニ山中一。故ニ亦名ニ山薊一也。和名乎介良。和名本草に、朮和名乎介良。字鏡に、白朮乎介良とあり。（編者云、橘忠兼の色葉字類抄にも、朮、ヲケラとある。）（中略）小野博、蒼朮は、三葉にして、胡枝子葉の如くなる

ものあり、秋月花開（サ）く、形薊（アザミ）花に似たり、白朮は蒼朮より苗も葉も大なり、三葉或は一葉にして、花は白色なり、唐種は各いさゝか異なり、と云り。雅澄按（フ）に、平介良（ヲケラ）と云ふが本よりの名にて、東語に宇家良（ウケラ）といへるか。集中に宇家良とよめるはみな東歌なればなり。また宇家良（ウケラ）が本にて、後に字鏡、和名抄の頃より訛りて、平家良（ヲケラ）といへるかしらず。宇（ウ）家良（ケラ）が本なるべくもおぼゆるなり。名義未だ詳ならず。

尙、古今要覽稿卷四百十八にも精細な考證がある。彼の江戸の國學者加藤千蔭の歌文集に、うけらが花と題してゐるのは、其の淵源が萬葉の歌詞に有すると考へられるのである。

次に「いはゐづら」と云ふ植物の考證は、古人もいろ〳〵説を出してゐるが、白井光太郎氏の考說が最も傾聽すべきものである。それは

いはゐづら

大正六年九月の東京日々新聞に、武藏野の植物と題して掲載せられてゐる。大略此うである。

「入間路の大屋が原のいはゐづらの歌のいはゐづらは、古來難解の植物として知られたもので、萬葉集古義の品物解には、未レ詳と書してある（編者云、但、古義の本註の方には、蔓草としてあるのである。）又荒木田嗣興の萬葉品類抄には、石に匐へる蔓也、石に一面に延びひろがる蔓を云ふなるべしと云ひ、高橋殘夢の万葉集名物考には、水草の藺ならんか、其をかつらとしも云ふは、葉の蔓を云ふにはあらず、其根の繁延するを以て藺つらと呼ぶなるべしと云つてある。又曾槃の國史昆蟲草木考には、石薜蔓といふ義にや、つらといへる詞は藤蔓の事のみにはあらじ、凡そ物の列

る事をつらといふなり、即ち万葉集に、巨勢山（コセヤマ）の列々（ツラ〱）椿（ツバキ）又、列樹（ツラキ）などのつらと同じ義なり云々とあつて、一定の説はない。然るに、玆に尾張の本草家神波愨氏の著聲括本草には、伯耆にいはひづるといふ方言の植物あることを云ひ、他處の「すべりひゆ」漢名馬歯莧なりと記してある。是亦方言により、亡びたる古名を復活せしめ得た一例である「すべりひゆ」はひけばぬる〱の歌の文句にも相應し、愉快に堪へない。此のいはゐづらは上野國の歌にもある。即ち「かみつけのかほやがぬまのいはゐづらひかばぬれつゝあをなたえそね」とありて、水草の如くなれど、すべりひゆは濕地にも生ずるので、其の歌のも矢張すべりひゆで差支ないと思ふ。

と云ふので、すべりひゆ（馬齒莧）の説を可としてあるのである。馬莧は和漢三才圖會の柔滑菜の部に出てゐる。

萬葉集卷二十の歌　多摩の横山

それから武藏野に關聯したもので、尚、多摩の横山の詠み込まれた歌が萬葉集に存する。それは卷二十の、

阿加胡麻乎。夜麻努爾波賀志。刀里加爾弖。多摩乃余許夜麻。加之由加也良牟。（赤駒をば山野に放し捕りかねて、夫の旅立の間に合はず、多摩の横山を徒歩で遣ることであらうかの意。）

で、豐島郡上丁椋椅部荒蟲之妻宇遲部黒女といふ婦人の作であると傳つてゐる。多摩の横山は武藏野の西に當つた連丘で、八王子市の南を走つてゐる一脈である。現に南多摩郡に横山村といふのがある。さうして畏くも此の度大正天皇の御陵を、此の村の大字下長房字龜ケ谷戸に定めさせられた事は、世人の熟知する所である。卷二十には右の



多摩の横山（平山村浅川河原より望む）

やうな防人(サキモリ)や、其の妻の歌がかれこれ收めてあつて、武藏國關係の物も右の外に尙存するが、地名などを詠み入れた著しいのは餘り無い。東歌の九首にしても、又此の卷二十の防人關係の歌にしても、武藏野の中に住んだ上代の人の純眞な聲であることは、今の我等に大になつかしみを持たせる所以である。

伊勢物語

伊勢物語には、武藏國に關する記事が數々ある。其の中に、

むかし男、武藏國まどひありきけり。その國なる女をよばひけり父はことにあはせんといひけるに、母なんあてなる人に心づけたりける。父はたゞ人にて、母なん藤原なりける。さてなんあてなる人にとは思ひける。此むこがねによみておこせたる。すむ里は

三吉野の里

武藏の國入間の郡三吉野の里なり。

みよしののたのむのかりもひたぶるに君がかたにぞよるとなくなる

わが方によるとなくなるみよしののたのむのかりをいつかわすれん

かへし、むこがねかへし、

人の國にてもかゝることは絶えずぞありける。

此は後の文學にも多少の影響を及してゐる。さうして其の地は初雁の名所となつたのである。又、

むかし男ありけり。女をぬすみて武藏國へ行く程に、盗人なりければ、くにのつかさからめければ、女をば草むらの中におきてにげにけり。道ゆく人、此の野は盗人ありとて、火をつけんとする

に、女わびて、

武藏野はけふはな燒きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

とよみけるを聞きて、この女をばとりて共にゆきにけり。（以上二件群書類從本に據る。）

とある、此の歌も亦有名である。古今和歌集には、初句を「春日野は」として春の部に出してある。それに就いては、諸說のある事であるが、契沖阿闍梨の餘材抄には伊勢物語の方が却つて古今集の歌を作りかへて、所にかなへたものかとも疑つてゐる。賀茂眞淵も亦同樣の意見を持つてゐた。

古今集

古今和歌集には、次の二首が著しい。それは

卷十五戀歌五、　讀人しらず

秋風の吹きとふきぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり

卷十七雜歌上、　讀人知らず

紫のひともとゆゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る

武藏野に紫を配合するのは之を始とする。但、紫生ふる野の事は、已に「託馬野爾生流紫(ツクマヌニオフルムラサキ)」の如く、萬葉集に見えてゐる。紫草に就いての諸說は、大約左の如くである。四時堂其諺の滑稽雜談卷四に、

蘇恭本草曰。紫草。苗似二蘭香一。莖赤節靑。二


紫草（牧野富太郎氏標本）

紫草

月開レ花。紫白色。結レ實白色。秋月熟。○時珍本草云。此草花紫根紫。可ニ以染一レ紫。故名。爾雅作ニ茈草一。三月逐レ蘢下レ子。九月實熟時刈レ草。春社前後采レ根陰乾。未レ花時采則根色鮮明。花過時采則根色黯惡。(中略)○藻鹽草云。紫がり、あづまに紫をとるを云也、紫の花咲きたる折に、馬に乘て野に出で、花を見て、弓の筈にてなしへてとらすると云也。△私に云 連俳に若紫を春に用、花紫を秋に用ゆ、然ども本草の如き、二三月花開といへり。和にある者は、秋月花開の儀あるにや可レ考。若紫とは春月の嫩苗をいふにこそ。

と衆說を列ねて、なか〳〵委しい。江戸名所圖會には次の如く見える。

武藏野の景物とす、(中略)紫は最上の色にして、古歌にも兒の色、

など詠み合せたり。根を碎りて染むる故に、紫の根染、又紫の根摺しもいへり。女に比しては、緣の色などもいへり。江戸の紫染は最も絶妙にして、他邦に比類なし。故に江戸紫の稱あり。

江戸紫

此は主に江戸紫の事を言つたのである。又鹿持雅澄は其の萬葉集品物解卷二に此う述べてゐる。

和名抄染色具に、本草云。紫草。兼名苑云。一名茈莨。今按。玉篇茈則古紫字也。和名無良佐岐。和名本草に、紫草和名无良佐岐とあり。小野博、紫草、春分後種を下す。長じて苗高さ一二尺許、葉は細長にして、早蓮草の葉の如く互生ふ。夏月枝梢、葉間ごとに白花開く。五出、形梅花に似て、大さ三分許、内に蕊なし。外に萼あり。亦五出にして細長し。花謝て實を結ぶ。萼ごとに一二實

形圓尖にして、紅藍花實に似て小し。熟して白色或淺褐を帶て光あり。京師の山に自生ることなし。その根直にして。皮深紫色皮汁を採て布帛を染む。と云り。名義は色によりて名けたり。牟良佐岐と云言の意は未詳ならず。

ムラサキの語源

ムラサキの語源は、宮崎道三郎氏の説に據つて、朝鮮語の Porasaik であるとしなければなるまい。古く染料として武藏の紫草が著名であつた事は、延喜式卷二十三民部下交易雜物の條に、武藏國紫草三千二百斤とあるので分る。又同書卷十四縫殿寮雜染用度の條を見ると、茜や藍と共に重要品であつたことも能く分るのである。大藏永常の國産考卷三には、紫草の培養、收納、製法を説く事が最も詳細である。彼の紫の一本や紫のゆかりなどゝ云ふ書名も、古歌に緣を取つて名づけたも

のである。

後撰集

後撰和歌集には、武藏野の歌が二首ある。卷六秋歌中に、

延喜の御時秋の歌召しありければ奉りける　　貫　之

女郎花(ヲミナヘシ)匂へる秋の武藏野は常よりもなほむつまじきかな

此は女郎花を配した歌の古いものである。卷十六雜歌二、讀人知らず

武藏野は袖ひづばかり分けしかど若紫は尋ね〔イ求め〕わびにき

こゝに若紫の語が現れたのは、注意すべき事である。

拾遺集

拾遺和歌集卷七物名(モノノナ)〔石楠草(さくなむさ)を詠む。〕に、如覺法師

紫の色にはさくなむさし野の草のゆかりと人もこそ知れ

是亦紫の事を言つてゐる。

此うして源氏物語に至っては、若紫の巻といふのがある。此は源氏の愛人、紫の上(藤壺の姪)の生ひたちを叙べた帖である。源氏が紫の上を望んで、

手につみていつしかも見む紫のねにかよひける野邊の若草

とながめ、又遂にそれを貰ひ受けて、二條院に渡し、或時の手習に、「やがて本にもとおぼすにや、手習など樣々に書きつゝみせたてまつり給ふ。いみじうをかしげにかき集め給へり。武藏野といへばかこたれぬと、紫の紙に書いたまへるすみつきの、いとことなるをとりて見ゐ給へり」〔紫上な也〕とて、源氏の歌がある。此に武藏野と云へば云々とあるのは、もと古今六帖五に

古今六帖

知らねどもむさし野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ

とあるのを引用したので、此の歌また常夏(トコナツ)の卷に、近江の君から女御の方への消息に、「あしがきのまぢかきほどにはさぶらひながら、今までかげふむばかりのしるしも侍らぬは、なこその關をやすゑさせ給ひつらんとなん、しらねどもむさしのといへばかしこけれども、あなかしこや云々。」とある文にも引用せられてゐる。此に於て武藏野と紫との關係は、頗る顯著となつたのである。

狹衣

源氏物語の後に出た小說の狹衣(サゴロモ)には、

　武藏野の霜枯に見しわれもかう秋しもおとる匂なりけり

といふ歌がある。地楡(ワレモカウ)を點出したのが珍しい。

後拾遺集

更に勅撰集を檢するに、後拾遺和歌集第七賀に、

屛風の繪

同じ屛風に〔入道攝政の賀のを指す〕武藏野のかた書きて侍りけるをよめる

むさし野を霧の晴間に見渡せば行末遠きこゝちこそすれ

平　兼盛

とある。是によると、當時屏風の繪に、廣漠たる武藏野の秋景を描いた事が知られて、甚だ面白い。

千載集

千載和歌集卷十九釋敎歌に、藤原俊成の作で、法華經法師品の「漸見㆓濕土泥㆒。決定知㆑近㆑水。」の心を詠んだのがある。これには、

ほりかねの井

武藏野のほりかねの井もあるものを嬉しくも〔もの字の無い本もある〕水の近づきにけり

堀兼の傳說

で、これに堀兼の井の名が見えてゐる。所在は如何と云ふに、淺井了意の江戸名所記には、牛込に在るとして、其の傳說をも記してゐる。

牛込村のほりかねの井はこれ武藏の名所なり、俊成卿の歌に云々

〔右の道り〕とよめり。昔繼母の讒によりて、其の父わが子に井をほらせけるが、いとけなかりければ、えほらで死にける故に、堀かねの井と名づて今にこれあり。

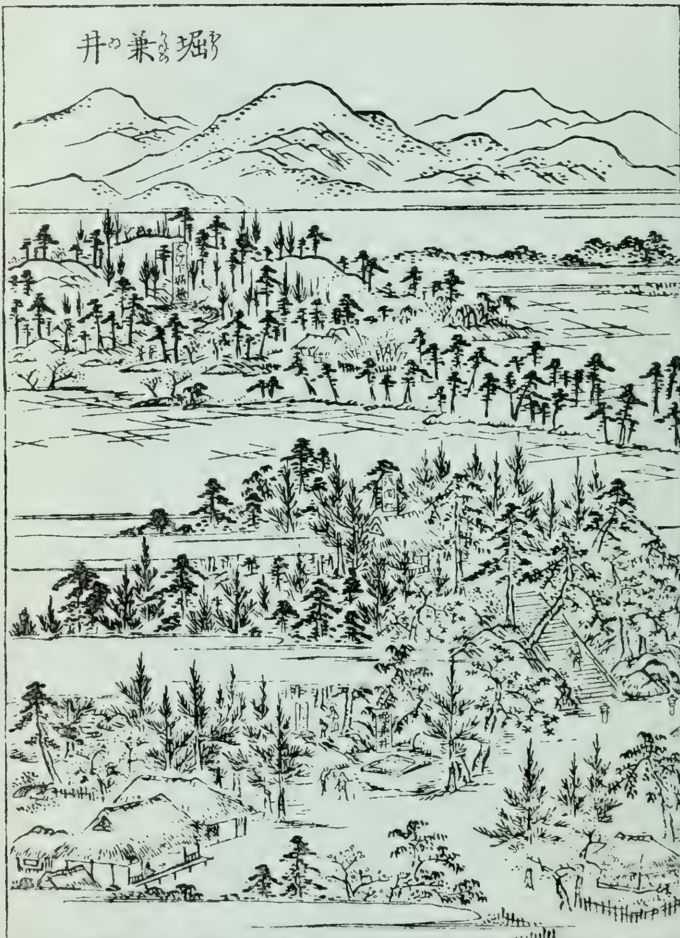
戸田茂睡の撰だと云ふ紫の一本（ヒトモト）卷下には、又次の如く見えてゐる。

紫の一本

堀兼の井、牛込逢坂の下の井をいふといへり。此水は山より出る清水を請て井となす。よき水なるゆゑ、遠き方よりも茶の水にくむ。よごれたる衣を洗へば、あかよく落ちて白くなるといふ。

又變つた說として、天野信景の隨筆鹽尻には、我が外山の御館內〔尾洲侯邸のこと〕に其の名が有ると記してゐるし、貝原益軒の扶桑記勝卷四には、麻布に在るとしてゐるのである。卽ち

ほりかねの井は、麻布天德寺の坤の方、人のやしきの後園にあり。



堀兼井（江戸名所圖繪所載）

いさぎよしと云。續無名抄にかけり。

といふのである。併し今埼玉縣入間郡に堀兼村がある。關八州古戰錄に、

繼母ノ繼子ヲ殺シテ名ニ負ヘタリト云堀カネノ井モ此ノ里〔入間郡三吉野の里を指す〕ニ近ク、川越領ノ野中ニ在リ。種玉庵宗祇の紀行〔道興准后の廻國雜記を誤つてさう云つてゐる〕ニ今ハ高井戸ト云ト侍レド、ソコハ多摩郡ニテ、遙ニ隔タレル所ナレバ、謬レル說ナルベシ。

とあるが、菊岡沾涼の諸國里人談には、其の消息を能く傳へてゐる。

武藏國入間郡掘兼村に、高き山に淺間宮の麓にすこし窪める所、掘兼の井の蹟なり。方六尺ばかりの石を疊して井桁とし、半は埋みて苔むしたり。傍に碑あり、ちかきころ川越のものゝふのこれ

を建しなり。

と云つて、碑文を載せ、又此のあたりに掘兼井と稱する所が多いが、此所を淺間（センゲン）掘兼といふ山をも言つてゐる。武江年表の寛永五年の條に、

三月秋元侯臣岩田彦助と云人、武州入間郡堀兼村、堀兼井の舊蹟久しく處を失はん事を歎き、石欄を置、傍に碑を建る。

とあるのは、右の文と見較ぶべきものである。故吉田東伍氏の大日本地名辭書に、

俊成卿の詠に入りしより後は、全く當國の名所と定りて、世々の歌人も其の詠多くして、徧く人の知る所なれど、其の舊跡は詳ならず。今當郡〔入間郡〕は元よりなり、他の郡にも堀兼の井と稱するもの夥多ありて、何れを實跡とも定めがたし。されど當所のを實

淺間堀兼

跡とすべきか。

と諸説を批判してある。後に掲げる宴曲の語句も亦此の地として綴つてゐるのを見る。

新古今集

新古今和歌集には二首ある。巻四秋歌上、

水無瀬にて十首の歌奉りし時　　左衛門督通光

むさし野や行けども秋のはてぞなきいかなる風の末に吹くらむ

同巻に、

五十首の歌奉りけるに、野徑月　　攝政太政大臣

行末は空も一つの武藏野に草の原より出づる月影

渺茫たる曠野に月を配した景趣は最も妙である。

以下尚一わたり勅撰集の主要な歌を拾つて見ようと思ふ、新勅撰和

歌集にも少くない。卷四秋歌上、

題しらず　西行法師

玉にぬく露はこぼれて武藏野の草の葉むすぶ秋の初風

卷十三戀歌三、

内大臣に侍りける時、家に百首の歌よみ侍りけるに名所戀と

いふ心を　前關白

武藏野や人の心のあさ露につらぬきとめぬ袖の白玉

卷十四戀歌四、　九條右大臣

むさし野の野中をわけて摘みそめし若紫の色はかぎりか

同卷

題しらず　　　　　　　　　讀人しらず

露霜の上とも知らじ武藏野の我はゆかりの草葉ならねば

卷十六雜歌一

　　　　　　　　　　　　　前大僧正慈圓

武藏野の春のけしきも知られけり垣根にめぐむ草のゆかりに

卷十九雜歌四

　　　　　　　　　　　　　小　　　町

武藏野のむかひの岡の草なればねを尋ねてもあはれとぞ思ふ

向の岡

此の向（ムカヒ）の岡は江戶名所圖會に、

今向岡と稱る地は、多摩川を北に帶て、西は關戶より發（オコツ）て、東は末長に終るもの是なり、連岡の長凡六里あまりあり。

とある。

續古今集

續古今和歌集には數首ある。卷四秋歌上、

建保三年内裏の歌合に　大納言通方

武藏野は月の入るべき嶺もなし尾花が末にかゝる白雲

此は着想に於て、詞藻に於て、眞に名吟と云つてよい。此のやうに尾花を配する事は、後の物にも影響してゐる。例へば彼の義經記に、辨

義經記

慶が矢を數多受けた狀を形容して、「武藏野の尾花の秋風に吹靡かるゝに異ならず。」とある。

卷六冬歌

土御門院御製

いづれぞと草の緣もとひわびぬ霜がれはつる武藏野のはら

巻十羇旅歌、

入道二品道助親王の家の五十首に野徑月

正三位知家

むさし野は行末近くなりにけりこよひぞ見つる山の端の月

名所の歌よみ侍りけるに

後鳥羽院下野

逢ふ人にとへどかはらぬ同じ名の幾日になりぬ武藏野の原

武藏野の廣いことを「同じ名の幾日になりぬ」と面白く言ひ廻した歌である。

續拾遺和歌集卷一春歌上、

土御門院御製

春のきる霞のつまやこもるらむまだわか草の武藏野のはら

此は伊勢物語の歌を本歌と遊ばしたのである。

卷九羇旅歌、

建保五年內裏の歌合に冬夕旅　正三位知家

冬の日の行く程もなき夕暮に猶里遠きむさし野のはら

新後撰集

新後撰和歌集卷五秋歌下、　權大納言師信

あこがれて行末遠き限をも月にみつべきむさし野の原

玉葉集

玉葉和歌集卷八旅歌、　右大臣

旅人のゆくかた〴〵にふみ分けて道あまたあるむさし野の原

卷十四雜歌一、

法印能海

出づるにも入るにも同じ武藏野の尾花をわくる秋の夜の月

前の通方のと同巧異曲である。

續千載和歌集卷四秋歌上、

題知らず　　よみ人しらず

武藏野はなほ行末も秋萩の花摺衣かぎり知られず

此は萩を配してゐるのが見所である。

卷五秋歌下、

月の歌の中に、　　式部卿久明親王

武藏野や入るべき嶺の遠ければ空に久しき秋の夜の月

此も「空に久しき」のあたり、名吟に数へてよい。

續後拾遺集

續後拾遺和歌集卷一春歌、

後九條内大臣の家に五首の歌よみ侍りける時、武藏野

從二位家隆

春もまだ色には出でずむさしのや若紫の雪の下草

新千載集

新千載和歌集卷四秋歌上、

寶治の百首の歌奉りける時、野月　鷹司院帥

武藏野や草は皆がら置く露に末遙なる月をみるかな

卷八羇旅歌、

後醍醐院の御時武者所に侍ひけるに、原霞といへる題をたまはりてつかうまつりける　源知行

いとゞなほ霞めば遠し山の端はさらでも見えぬ武藏野の原

建仁元年五十首の歌奉りける時、野徑月　前中納言定家

廻りあはむ空行く月の行末もまだはるかなる武藏野の原

題しらず　從三位爲理

草枕同じ旅寢のかはらねば日數忘るゝむさし野の原

此は前に掲げた下野の「同じ名のいくかになりぬ」と同一趣向の歌である。

新拾遺和歌集卷五秋歌下、

從二位家隆

小男鹿(サヲシカ)の夜半の草ぶし明けぬれど歸る山なき武藏野のはら

卷九覊旅歌、

旅の歌に　藤原行春

分け行けど花の千草のはてもなし秋を限のむさし野の原

是亦詞姿の優麗な詠である。

新後拾遺集

新後拾遺和歌集卷三夏歌、

題しらず　よみ人しらず

行末は露だにおかじ夕立の雲にあまれる武藏野のはら

こゝに夕立の雲を點出したことは、注意しなければならぬ。

卷十羇旅歌、

旅行の心を　宗久法師

むさし野もさすが果ある日數にや富士のねならぬ山もみゆらん

此は一寸變つた趣向で面白い。

旅行の心を　藤原長秀

富士のねをふりさけみれば白雪の尾花につゞくむさし野の原

新續古今集

新續古今和歌集卷十羇旅歌、

延文二年百首の歌奉りけるとき　　前大納言爲定

むさし野はけふこそ分けて限なく遠く來にける旅は知らるれ

新葉集

小手指原

次に吉野の朝廷で勅撰に准ぜられた新葉集に就いて見るに、卷十八雜歌上に、中務卿宗良親王の小手指原での御詠がある。武藏野關係のものであるからこゝに載せよう。正平七年(觀應三年)閏二月の合戰の折の事と思はれる。

武藏の國へうちこえてこてさしはらといふ所におりゐて手分などし侍りし時、いさみさるべきよしつはものどもにめし仰せ侍りしついでに、思ひつゞけ侍りし

君のため世のため何か惜しからむ捨てゝかひある命なりせば

其の慷慨激越の調、一誦三嘆しない者があらうか。其の地は所澤の西に當り、久米、入間二流の間に在る平原である。合戰の事は、太平記の卷十及び卷卅一に所見がある。因みに宗良親王の李花集には、武藏野の歌が種々存する。

宗良親王の李花集

野月とて

さすが又限あればやむさし野の草葉の末に月はいづらん

名所野

むさし野の草葉にのみぞかこたるゝ同じゆかりのなきにつけても

心細く覺侍し比、ことにたづきなき心ちしてよみ侍し

むさし野の草のゆかりも遠ければ露消えぬともたれかつげまし

中古以降の歌人が想像を以て詠み出したものとは雲泥の差で、實に人を動かす力の籠つた御作である。

尚、藤原長清の撰んだ夫木和歌抄に就いて見るに、左の數首〔卷二十二所收〕が殊に風情のあるものである。

野望草繁　　俊頼朝臣

武藏野のあしの荻生を分けゆけば末葉よりこそ空はみえけれ

五十首、野春雨　　土御門院小宰相

春雨に又も萠えなん武藏野やけぶりののちの荻の燒原

右等は荻を配した歌である。

鹿　　後京極攝政

むさし野の篠のをふゞき寒き夜に妻もこもらぬ小男鹿の聲

前の家隆のと同じく、鹿を配したものである。

　武藏野にて富士の高嶺の見えけるを　　法印最信

むさし野は山の端知らぬならひにも富士の高嶺はなほぞ見えける

つゝきの原

前の長秀のと同樣、富士を配したものである。法橋顯昭の詠に、つゝきの原を詠じたのがある。

武藏野の草のゆかりもとひわびぬつゝきの原の雪の夕暮

といふのである。今の都築郡の內であらう。光俊朝臣〔葉室家〕の

つゝきの岡

いかにせんつゝきの岡の葛の葉のうらみて後は又もかへらず

と詠じたのも、〔卷二十一所收〕同じ地であらう。江戸名所圖會に、

都筑の丘〔綴喜或綴幾に作る〕小佛（コホトケ）の嶺より小山田里迄は多磨郡に屬せり。又官林の案內山と云より神奈川迄の間は都筑郡に屬せり。南北に高

低なく續く故に、つゞきの丘の名ありと云へり。

おほかの森

とあるを參考しなければならぬ。又おほかの森を詠んだ光俊朝臣の歌〔卷二十二所收〕もある。

紅葉散るおほかの森のゆふたすき次めにかゝる山のはもなし

このうたは、武藏野をすぎけるに、山は見えずして、おほかのもりといふ森ばかりわづかにもみちしてみえけるによめると云々。

おほかの森とは何處であるか今詳でない。光俊に隅田河畔での詠吟の存する事は後に示すやうである。是或は待乳山を指すものかも知れぬ。

駒迎

又駒迎を詠んだ源順(シタガフ)の歌〔卷十二所收〕も見えてゐる。

むさし野の駒迎にや關山のかひうちこえて今朝はきつらん

武藏野の牧

武藏野と馬との關係は、前に示した万葉集の宇遲部黑女といふ女の歌に、駒を山野に放牧した有樣が詠まれてゐるので分る。其の後所々に御牧を置かれたので、石川牧、由比牧、小川牧〔小野とも傳へられる〕立野牧などは、夙く延喜式卷四十八に見えてゐるのである。

にげ水

又逃水を詠んだ俊賴朝臣の歌〔卷二十六所收〕もある。

東路にありといふなる逃水のにげかくれても世をすごすかな

歌には東路と廣い詞が用ゐてあるが、古來之を武藏野の景物としてゐるのである。關八州古戰錄に、

其水ハ多摩郡府中ノ六所明神ノ邊ニ在リ、他國ニテ蜻蛉ノ沼、陽炎ノ水、室ノ八島ナド呼ビ傳ヘタル類ナルニヤ。

武藏名所考

とある。併し此は信じ難い。冕嶠陳人の武藏名所考(文政七年刊)に、

此ういふ說がある。

按ずるに舊說或は陽炎とし、或は行潦とす。然れども源俊賴朝臣の逃かくれても世をわたるかなといへる歌に於いて切ならざるが如し。おもふに本州多摩川のほとり土地墳起せる所にては水地中に伏し、數里にして涌出るものあり、豊島郡石神井村三寶池、多摩郡井草村善福寺池、牟禮村井頭池などみな多摩川の伏流ならんと云說あり、(中略) 逃かくるといふ歌に於ては伏流とするこそ穩ならめ。

といふので、合理的であつて、採るべき點があるかと思ふ。併し陽炎說も、古來なか〳〵有力である。夙く菊岡沾涼の諸國里人談（寬保三年刊）の如きに、次のやうに說いてゐる。

迯水はまことの水にあらず、むさし野の莽良の草もわかく生たちて麗(ウラヽカ)なる春のそらに、地氣立て、こなたより見れば、草の葉末をしろ〳〵と水の流るゝ如くに見ゆるなり。その所に至りて見れば、その影なくて、また向に流るゝ如くの影あり。いづれまでも其所を定めず行ほど先へ行て迯行やうなるゆゑに、かく名付たり。春より夏かけてあり、秋冬はなし。

此うい說を承けて、一層委しく述べてゐるものに、鶴磯樵夫の武藏野話(文政十二年刊)がある。其の二編之一に、

武藏野話

一體は原中の氣にして、夜中土地よりむし昇りし烟靄(モヤ)の一面に引わたしたるを、風にて地上に吹しくゆゑ、自然と白く水の如くみゆるなり。彼方より來る人を見れば、腰より下は烟靄にて見えず。

水中を渡るかと疑へば、此方をもまたかなたにて水ありとおもへるなり。近寄てさきに水ありやと問へば、なしと答ふ。朝辰半刻（イツヽハントキ）ころになれば、陽氣盛になり、次第々々にもや消て跡かたもなし。これを逃水といふ。又夕方申半刻（ナヽツハントキ）比よりまゝ見る事もあり。前にいへるごとくいづれ原中の氣と知るべし。(下略)

と言つて、圖までも載せてゐるのである。現に鳥居龍藏氏の如きも、此ういふミレージ(Mirage)說を主張して居られる。武藏野及其周圍第六頁に、「逃水は無樹帶に起る一種のミラージの樣なものと思ふが、このミラージは蒙古平原や大陸に於て常に見る現象である。」と言つてあるのである。とにかく思ふに、彼の信濃なる園原の帚木の如く、ありとは見えて追求し難い意を、歌人として興じたものであらう。

又一轉して六家集から少しく抜いて見るに、藤原良經の秋篠月清集に、

雉

武藏野にきゞすも妻やこもるらむけふの煙の下になくなり

僧慈圓の拾玉集に、

早蕨

むさし野の草葉にまじる早蕨をげに紫の塵かとぞ見る

藤原家隆の壬二集に、百首和歌（爲家卿家會）

武藏野は分行く草の高ければ末葉の露ぞ雨と降りける

春の歌とて

むさし野の荻の燒原かきわけて遠方人の霞みゆくらむ

古今の一句をこめて歌よみ侍りけるに〔編者云、古今の一句とは、讀人知らずの「ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くる宵は露けかりけり」の歌の句を言ふのである。〕

獨ぬる床は草葉の假枕幾夜になりぬむさし野の原

等がある。此等は古歌の詞を蹈襲した所に、作者自らも興趣のあることゝ考へてゐたらしい。

更に轉じて、群書類從和歌部の私撰集や千首や百首や歌合などに就いて探つて見るに、續詞花和歌集卷十六雜上に、

續詞花集

清輔四位して侍りける時よろこびいひにつかはすとて

藤原重家朝臣

武藏野の若紫の衣手はゆかりまでこそ嬉しかりけれ

雲葉集

雲葉和歌集卷六和歌中 月部

道助法親王家五十首歌に野徑月　中納言定家

武藏野は露おく程の遠ければ月を衣にきぬ人ぞなき

新和歌集

新和歌集卷六羇旅歌、

野旅　源親行

武藏野や落ちて草葉になほぞおく分行く人の袖の白露

續現葉集

續現葉和歌集卷七羇旅歌、

平貞俊

むさし野や里遠ければ鷄（トリ）の音を草の枕にきくよはもなし

人煙の稀薄な曠野の趣がかなりよく出てゐる。

玄遲法師

むさし野や幾夜の夢のかはるらむ結ぶは同じ草の枕に

爲家卿千首

爲家卿千首雜、

武藏野や誰が宿占むるしるべとて草の末葉に烟立つらむ

師兼卿千首

師兼卿千首に釋敎の歌とて、化城喩

むさし野は尙末遠し假初の草の庵に心とゞむな

化城喩といふのは、法華經第七品の名である。

堀川百首

堀川院御時百首和歌（稱二太郎百首一 康和年中）

早蕨　　　右兵衛督師頼

武藏野はまだやかなくに春くればいそぎもえ出る下わらびかな

前齋院河内

武藏野にことしはもえよ紫のわらびは草のゆかりならねど

此等は蕨の題詠に武藏の原野を思ひ浮べた作である。

爲忠朝臣家百首

丹後守爲忠朝臣家百首に、

木間月　藤原忠成

むさし野のあさぢの原のこくれよりしかわけいづる秋の夜の月

此は野に木立を思ひ合せたので珍しい歌である。

正治二年百首

正治二年第二度百首和歌、

草ノ花　源家長

むさし野の草におぼめく女郞花つまもこもれるこゝちこそすれ

女房宮內卿

むさしのや色をぞ思ふ藤袴その紫のゆかりならねど

水無瀨殿戀十五首歌合

建仁二年九月十三夜の水無瀨殿戀十五首歌合に、三十二番羇中戀の左方、有家朝臣

むさし野やひとりおもひにむせぶかなきつゝなれにしつまもこもらで

これにも伊勢物語の歌詞を引いてゐる。

建永二年の最勝四天王院障子和歌には、武藏野も一名所としてフェボリット　サブゼクトとなつてゐる。

最勝四天王院障子和歌

武藏野や春はいづくに宿とはん霞も道も末をしらねば　御製〔土御門天皇〕

武藏野の春やく草のゆかりとて烟に深き朝霞哉　慈圓

行末のながめは果もなかりけり霞ぞあくるむさし野のはら　通光

武藏野の春はゆかりもなけれども霞にこもる若草の露　俊成女

霞みても誰にとはまし武藏野のゆかりもしらぬ春の若草　有家

武藏野のゆかりの色もとひわびぬ皆がら霞む春の若草　定家

過來つる野山もうつる程もなし春の日數は武藏野のはら　家隆

淺緑霞むばかりの若草に春もこもれる武藏野のはら　雅經

見渡せば霞ぞなびくむさし野のまだわか草の春風の頃　具親

武藏野や横雲霞む暦に春の影なき色は見えつゝ　秀能

即ち何れも春の歌として、霞を詠じ、若草を詠み込んでゐる。「ゆかり」といふ語の多く用ゐられてゐることは、注目に値する。

建保元年二月の內裏詩歌合に、野外春望、十五番、左方、經高朝臣

内裏詩歌合

の詩に對して、右方、宗宣の歌、

むさし野や分け行く方はしら雲のとだゆる空のはつかりのこゑ

内裏名所百首

建保三年の内裏名所百首は、國々の多くの名所を拉して詠じてゐる一層興味のあるものである。武藏野は秋とし、角太河(スミダ)は雜としてある。武藏野の十二首は次のやうである。

綠なる春はひとつのわか草も秋あらはるゝむさし野の原　　女房〔實は順德院〕

むさし野や草は皆がらおく露のゆかりもとむる袖の秋風　　行意

誰が方によるなく雁の音にたてゝ涙うつろふむさし野の原　　定家

あだならぬ色さへ袖にうつりけりゆかりは露の武藏野のはら
家衡

淚さへぬれそふ袖に蟲の音も亂れてしげき武藏野のはら
俊成女

おもひやる行方は遠き武藏野も眺めにせばき秋霧のころ
兵衛内侍

假庵のつまといふ風も寒き夜にいくよかねなんむさし野のはら
家隆

月と眺め花と思ふも武藏野の末は皆がら薄霧の空
忠定

むさし野の淺茅色づく今よりや夜寒の衣雁も鳴なん
知家

武藏野の霧のまよひのをみなへし妻もこもれる烟とぞみる

範宗

武藏野や月影ながらしぐれけり尾花がうへの露の下道　　行能

武藏野やいづくの草に妻こめてきのふもけふも鹿のなくらん　　康光

月卿雲客妬歌合

又同建保三年六月十一日の月卿雲客妬歌合に、野外夏草の題で、栗下覆勘右大辨藤原定高〔定家卿の事であらう〕の歌に、

むさし野の萩や薄やほりたてゝ瓜やなすびやうゑてもたばや

とあるのは、狂歌風で珍とすべきである。

建保五年歌合

建保五年十一月の歌合に、九番、冬野霰、左方、御製

むさし野の草はみながら埋れて霰にのこるさゝの音かな

霰が詠み込まれてゐるのは、注意したければならぬ。四十五番、冬夕

旅、右方、知家朝臣

冬の日のゆくほどもなき夕暮に猶里とほき武藏野のはら

建保七年二月の歌合に、九番、春月、右方、範綱　建保七年歌合

武藏野や眺むる末の山のはに麓かすめる春の月影

十四番、春野、右方、康光

草枕またやむすばん春の日のかすみてくらす武藏野のはら

白河殿七百首（文永二年）に、　白河殿七百首

羇中野　禪信

草枕かりそめとこそ契りしに幾夜かへぬる武藏野の原

龜山殿七百首（後宇多天皇御宇）に、　龜山殿七百首

野霞　爲親朝臣

春霞へだつる末はいづくともみてだにゆかぬ武藏野の原

名所野　　侍從中納言

我道のためしとぞみる武藏野やなほゆくすゑの限なければ

五百番歌合

天授元年の五百番歌合に、十九番、右方、關白

むさし野はいづくを春の限とも山の端しらで立つ霞かな

爲相卿千首

次に又續群書類從和歌部に就いて見るに、爲相卿千首、名所

秋草の花に分入る武藏野も末までゆかば霜やむすばん

榮雅千首

榮雅千首、羇中野、

宿とはん行末のみか過ぎ來つるあとだに遠きむさし野のはら

正廣三百六十番自歌合

松下正廣三百六十番自歌合に、春秋の部四十四番右、野月

秋の月半は露の光かな千ぐさをわくるむさし野の原

夏冬の部五十一番右、　枯野雪

むさし野のすゝき高かやうづもれてあまたの山のならぶ雪かな

遠忠五十番自歌合

十市遠忠五十番自歌合に、二十一番左、野外蟲

むさし野や音をなく蟲の數々に秋のおもひのはてもしられず

和漢名所詩歌合

和漢名所詩歌合といふのがある。九條内大臣基家の詠である。其の趣向は亦興味がある。其の十一番に、

左　梁園

夕占二一花一雪浮レ蓋。曉入二群山一月作レ隣。

右　武藏野

むさし野はあすもいかなる露ならん同じ衣の秋の花染

其の十二番に、

左

霜冷鶴洲松泊夜。鶯吟梁館竹歌春。

右

落積る雪の消えずば武藏野の草葉の下や海とならまし

以上上古から近古迄の歌をいろ〳〵と列擧したが、實は此ういふ類を洽く集めるのは際限の無い事であるから、更に轉じて人口に膾炙してゐるものを一往吟味して置かうと思ふ。

人口に膾炙してゐる歌

むさし野は月の入るべき山もなし草より出でゝ草にこそ入れ

月の入るべき山もなしの歌

といふのは、誰もよく知つてゐる所である。此の着想は既に新古今集の攝政太政大臣の歌や續古今集の通方の歌に存する所である。山岡浚明の類聚名物考の和歌部八には、三の句を「山ぞなき」とし、又「月

のかくるゝ方ぞなき」とも傳へ來つてゐる由を註してゐる。蓋し此の歌は、初から一首ではなくて、連歌であらう。柳亭種彦の用捨箱〔温知叢書所收〕に考證して、此う述べてゐる。それは元和頃の物と思はれる扇の草紙と云ふ本に、草より出でゝの歌がある、古い俳諧の附合であらう。さうして元和三年の德永種久の紀行江戸めぐりにも既に之を引いて、云々と古い歌にも詠まれてゐると云つてゐるとある。

太田道灌の歌

武藏野の詠歌で有名な人は、太田持資入道道灌である。道灌は寛正五年〔野史に、足利家譜、成氏軍記並に六年に作る、今、實錄、梅花無盡藏に從ふと註してゐる。〕の春、京師に朝して、將軍義政に見えた。後土御門天皇は詔して、武藏野の事を問はせられた。道灌は乃ち和歌を以て答へ奉つたのである。

露おかぬかたもありけり夕立の空よりひろき武藏野の原

〔都鳥の詠及び「我が庵は」の歌もあるが、今略する。〕處が叡感あらせられて、御製を賜つたのである。

武藏野は刈萱のみと思ひしにかゝる言葉の花や咲くらむ〔野史に、武者物語には「武藏野は萱原のみときゝしかどかゝる言葉の花に咲くかな」とあると註してゐる。武笠三氏の國民の歌といふ本には、鹽尻に據つて出してあるが、それには、「刈萱」が「高萱」となつてゐる。さうして異說として、末句に「花もさきける」と註してある。〕

此の逸事は世人の熟知する所である。併し能く考へると、「露おかぬ」の歌は、新後拾遺集の「行末は」の歌と着想が相似てゐるのは、一奇であると言はなければならぬ。因みに道灌の歌集には、慕景集〔群書類從所收〕と花月百首〔續群書類從所收〕とがある。慕景集は其の父道眞の集であるとの說もあることが、國書解題に見えてゐる。又此の頃渡邊世祐氏が史學會で講演せられた考證に據ると、此は道灌に假託した物で、偽撰であるとの事である。花月百首は飛鳥井雅親が批點を加へてゐる。是亦精查

を要すべき書であらう。

古歌に就いて考へるに當つて、一言附加して置くのは、狹山(サヤマ)及び狹山の池である。藻鹽草を見るに、狹山は武藏又河内とし、星、葛、五月にともす火、鹿を詠むとし、狹山池は、武藏なる狹山の池の三稜草(ミクリナハ)、菖蒲(アヤメ)、蓴菜(ネヌナハ)を詠むとしてゐる。千載和歌集卷三夏、修理大夫顯季

　五月闇さやまの峯にともす火は雲の絶間の星かとぞ見る

新古今和歌集卷五秋下、前中納言匡房

　妻こふる鹿のたちどを尋ぬれば狹山が裾に秋風ぞ吹く

此等は果して武藏の狹山を詠じたのであらうか。古今和歌六帖第六、

　戀すてふ狹山の池のみくりこそ引けば絶えすれ我やねたゆる

新撰六帖題和歌第六帖、光俊



狭山（村山村三本榎附近より望む）

さやまなる池のみくりのねもみねど打はへ人のくるぞまたるゝ

此等も果して武藏のを指したのであるか、確には定め難い。枕草子の「池は」の段に、「狹山の池、みくりといふ歌のをかしく覺ゆるにやあらむ。」とあつて加藤盤齋の抄には、之を武藏とし、右の古今六帖の歌を引證してゐる。狹山は今の北、西兩多摩郡に連亙し、池は筥の池とも云つて、西多摩郡箱根ヶ崎村に屬してゐる。而も武藏には、尙大里郡にも同名の山及び池がある。彼の北國紀行〔後に出す〕に見えるものは、地理上却つて後者の方であると考へられる。

上來列擧した古歌を一誦して、更に思ひ浮べられるのは連歌である。連歌はもと和歌の一變したもので、殊に室町時代に於て、著しく公武の間に盛行し、其の集の今日に傳るものが少くない。文明元年に成つ

河越千句

た河越千句には、心敬や宗祇の名が見え、太田備中入道道眞〔道灌の父〕や栗原入道幾弘などが列座の面々である。中に、

かすむいづくぞむさし野のはら　道眞

夕日かげ入間の里はみえわかず　滿助

竹林抄

などの句が見出される。竹林抄〔宗祇が宗砌、心敬、行助、專順等七人の連歌を集めた物、文明十八年成る。〕の中に、

むさし野やかやがすゑ吹く秋の風　心敬

の句があり、

むさし野に天の原なる月更けて　宗砌

の句もあり、さうして又

むさし野のみどりの末や天のはら　智蘊

熊野法樂千句

の句もある。熊野法樂千句に、

富士の山たえずや風のめぐるらん　行助
わくるは遠き武藏野の原　通賢
茂りてや猶たか萱の下みだれ　常安
などがある。源氏國名百韻〔源氏物語の巻の名と六十六ヶ國の名とを詠み込んだもの〕には、
藤袴尾花もかるゝ冬のきて　寛正
ふじのかげふむ武藏野の霜　證
うへなきは若紫の色なれや　御
などがある。「ふじのかげふむ」は奇抜な詞で面白い。牡丹花肖柏の春夢草には、住吉社壇での詠吟を收めてゐる。
武藏野
むさし野や萱が亂に妻乞の思をみせて小鹿鳴也

源氏國名百韻

春夢草

原薄

染出す初花薄むらさきのゆかりも秋や武藏野の原

此の二首は連歌では無く、普通の和歌である。後の一首は殊に緣の有る古語を引用したものである。宗長の壁草には、

　　　　　　　　　　　　　　　　壁草

むさし野は空や行く〳〵末ならん
　いつをか限わがたびの鄕
むさし野やわくれば遠き末もみつ
　わかれしかねの夕ぐれのころ
よこぐもにの幾夜ともなく朝立ちて
　幾日かわくるむさし野のはら

などが見えてゐる。要するに連歌者流にも古歌の影響が著しく及んで

宴曲の善光寺修行

ゐるのである。

翻つて韻文の他の方面を觀ようと思ふ。鎌倉時代の謠物に宴曲がある。其の善光寺修行〔宴曲抄上所收〕と題するものに、鎌倉を發足して善光寺詣をする道行を叙べたものであつて、當時の交通の狀態を知るのに、大に參考となるものである。中に武藏野を通過する事が見えてゐる。

（前略）吹送由井の濱風音たてゝ。頻によする浦浪を。なほ顧る常葉山。かはらぬ松の綠の。千年も遠き行末。分すぐる秋の叢。小萱苅萱露ながら。澤邊の道を朝立て。袖うちはらふ唐ごろも。きつゝ馴にしといひし人の。干飯たうべし古も。かゝりし井手の澤邊かとよ。小山田の里に來にけらし。過來方を隔れば。霞の關といまぞしる。思きや我につれなき人をこひ。かくほど袖をぬらす

べしとは。久米河の逢瀬をたどる苦しさ。武藏野はかぎりもしらずはてもなし。千種の花の色々。移ひやすき露の下に。よわるか蟲の聲々。草の原より出る月の。尾花が末に入までに。ほのかにのこる晨明の。光も細き曉。尋ても見ばや堀難の。出難かりし瑞籬の。久き跡や是ならむ。あだながらむすぶ契の名殘にも。深くやおもひ入間河。あのこの里にいざ又とまらば。誰にか早敷妙の。枕ならべんとおもへども。姉にそはずのもりてしも。落る涙のしがらみは。げに大藏に槻川の。流も早く比企野が原。秋風はげし吹上の。梢もさびしくならぬ梨。打渡す早瀬に駒やなづむらん。たぎりて落る浪の荒河行過て。下にながるゝ見馴河。見なれぬ渡をたどるらし。朝市の里動むまで立さわぐ。是やは兒玉々鉾の。

道行人にこと〻はん。者の武の弓影にさわぐ雉が岡。矢並に見ゆる鏑河。今宵はさても山名越ぞ。いざ倉賀野にとゞまらん（下略）

霞の關

頻々としてあらはれる地名を見ると、武藏野の景狀が能く想ひやられるのである。それは武藏野横斷の旅行に實際の經驗を持つた人の作であるからである。其の路次の地理を案ずるに、鎌倉の常葉山下を過ぎ、井手澤を經て、小山田の里霞の關に到つてゐる。こゝに霞の關とあるのは、今の南多摩郡關戸に當る。處が今一般に市內麴町區の外務省の場所を霞が關と呼んでゐる。又江戸名所圖會を見ると、四谷大木戸の所を土俗霞が關或は旭の關とも云ひ、內藤新宿の大宗寺は霞關山と號するといふやうな事が書いてある。いづれも古意に適つてゐないやうである。關岡野洲良の說に、

愚案、此關戸村は鎌倉治世の頃、軍防の爲に玉川の流を要害に取て置かれたる剗(セキ)ならんとおぼし。職員令に關剗、義解に謂依レ律。關有檢判之處。剗者塹柵(ミゾカキ)之所是。とありて、關は國界にある例、剗は軍防の料也。ともに訓はせきなる故に通はして關の字を書來れども、地理によりて考へわかつべき事也。

とあつて、此の關の意義を解釋してゐる。江戸名所圖會にも、小山田關舊址の題を掲げて、其の關の事は記してゐるのであるが、それが霞が關だとは言つてゐない。即ち

今關戸と稱するところ則これなり。多摩川の南岸にそひて古府中より帝都及び鎌倉への街道なり。東奧北越の二道共に此地を往還せざるはなし。小山田は莊の名にして、此地も昔は同じ庄内にてありしなり。今は邑名にのみ殘りて、此所より二里ばかり南の方に小山田村と稱

するこれあり。

とある。彼の夫木和歌抄には、小山田關を武藏と註して、左の二首を載せてゐる。

あふことは苗代水にまかせてぞこさんこさじは小山田の關

よみ人しらず

あふことは苗代水を引止めて通しはてぬや小山田の關

法橋顯昭

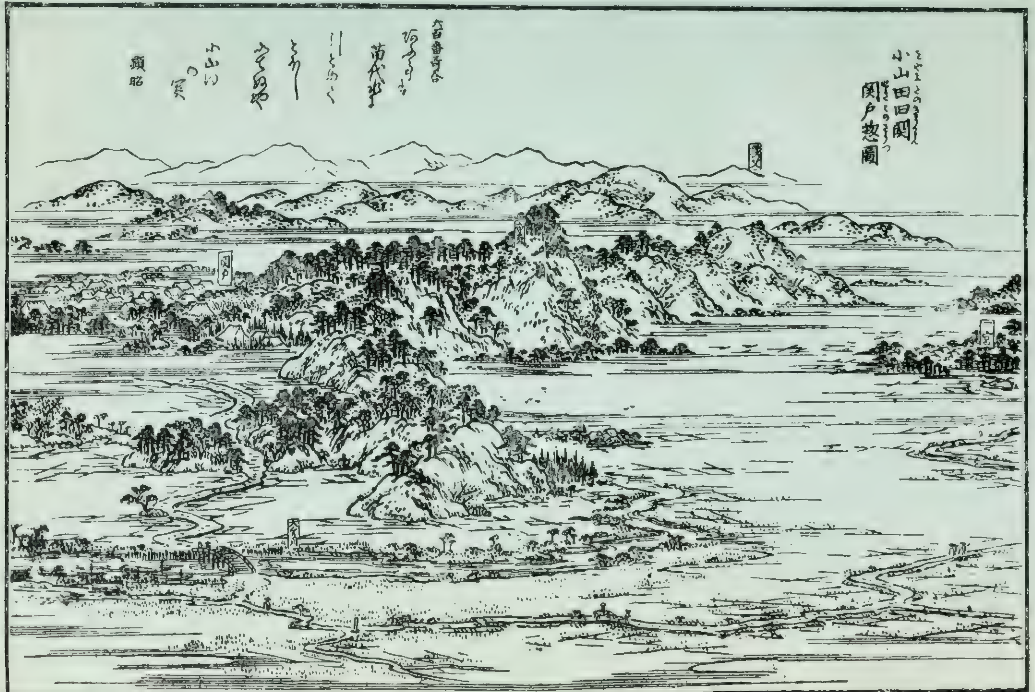
故吉田東伍氏の說に、

今按、霞關の始末及び其位置は、多く古書に所見なし。然れども曾我物語、方角抄、回國雜記に參考すれば、關戶の地なりとするを得ん。新拾遺集に「いたづらに名をのみとめて東路の霞の關も

春ぞくれぬる」〔雜歌上、讀人不知の歌である。〕とあるを初見とすれど、古代の一關なるべし（中略）而も小山田霞の關名の古史に見えざるは、重要の守固ならざりしに由るは勿論なるが、軍防令義解に「境界之上(ホトリ)。臨時置レ關。應ニ守固一者。並置ニ配兵士一。分番上下。」とあれば、王朝の比に臨時權置のものが、其名を地方にのみ傳へて、諸和歌集、

宴曲抄等の興味に入りしなり。〔右の令義解の文は割註と本文とが交錯してゐる。〕

とある。以上の諸説を綜合して、宴曲の詞句に參すると、霞關の位置及び通路は、共に明瞭である。「つれなき人をこひかくほど云々」とある語句には、巧に戀が窪を隱題としてゐる。戀が窪は國府(コフ)が窪が轉訛して、却つて雅名となつたと考へる。國分寺の所である。久米川も右と同じく北多摩郡内である。堀兼の井の事は、既に前に説明して置い



小山田關（江戸名所圖繪所載）

た。路は入間郡に入る。入間川は名邑である。そはずの森は今明かでないけれども、先づは其の附近であらう。其の名が興が有るから歌詞に採られ、掛詞ともなつたのである。大藏は比企郡菅谷村の大字に遺り、槻川は都幾川とも書いて、其の北に當つてゐる。比企野が原、吹上を經て奈良梨に至る。此の地は今の八和田村の內である。荒河を渡り、兒玉郡での主な流である所の身馴川を越えて兒玉の里にはいる。雉岡は今の兒玉の內の八幡山町に在る。鏑河は上野國で、其の名は甘樂河の訛であるといふ。藤岡の西北の山名越をして、倉賀野に赴いたのである。

武藏野の通路

右の序を以て、武藏野に於ける通路を考へるに、府中の邊はさすがに要衝であつたのである。平治物語には、信西の子息遠流の事の條の

道行に、「武藏野や堀兼の井をも尋ねて下野に下る事を記し、又源平盛衰記には、頼朝が隅田川に陣し、川に浮橋を渡して打渡り、豐島の上瀧野河松橋〔長門本平家物語には板橋とある。〕に陣し、六所大明神に詣で、行き〳〵て足柄を越える事が見える。義經記には、義經が奥州から上る途に、板橋、國府(コフ)の六所の町を經て、平塚に出た事を載せてゐる。幸若舞の詞の馬揃末來記に、國府の六所ぶんばいの地名も出てゐる。六所は即ち府中の總社で、今、大國魂神社と稱する。御伽草子の。唐絲草紙(カライト)にも、信濃から鎌倉に至る韻文的な道行がある。前に掲げた宴曲と對照の用に供しよう。

唐絲草紙の道行

萬壽の姫は、あめのみやを立出でゝ、通る所はどこ〳〵ぞ。親子のちぎりはふかしの里こそめでたけれ、淺間の嶽にたつけぶり、身

にはあまれるおもひにや、いま入る山を打過ぎて、上野の國にかくれなき、ときはの宿をも打越えて、一の御宮をふしをがみ、二のたまはらに出でしかば、おやの名のみかちゝぶ山、すゑまつ山を打過ぎて、霞の關をもわけこして、入間の郡やせの里、いくらの里をか越しつらん。くもらぬかげはほしのやの、とがみの原をも打過ぎて、鎌倉山につき給ふ。

謠曲東北の道行

此の霞の關と八瀨の里とは、序次が相前後してゐる。武藏野が歌枕として著名となつた結果、謠曲の文句にも之を用ゐたものがある。それは東北（トウボク）に於けるワキ僧の道行に、

春立つや、霞の關をけさ越えて、〳〵、はてはありけりむさし野を、分けくらしつゝ跡遠き、山また山の雲を經て、都の空も

近づくや、旅までのどけかるらん。〳〵。

とある。謠曲と文學上の關係のある狂言の詞（素より歌謠ではないけれども）にも次の如きものがあるから附記して置かう。針立雷に於ける醫者の道行に、

狂言針立雷

やあ參る程に、これは廣い野へ出た。定めてこれは聞及うだ武藏野と云ふがこれであらう。扨も〳〵廣い事かな。やあ今迄好い天氣であつたが、俄に暗うなつた。夕立がすると見えた。此の野で夕立に遇うたら、何ともなるまい。云々

同入間川

入間川には、大名と太郎冠者との途すがらの詞に、渺々たる武藏野を通る事を云つてゐる。近世の淨瑠璃にも、武藏野の事を語つたのがある。

荒御靈新田神德

それは福内鬼外卽ち平賀源内が門人等と合作した矢口後日荒御靈新田

神德の山口觀音の段に、

見渡せば古き名所樣々に、有といふなる遁水の、遁隱れても世を渡る、民の手業の何故に、堀兼の井の水底を、今もたづねて久米川や、青梅も餘所に入見山、關戸もさゝぬ所澤、水は流れて入間川、岸村山の里つゞき、限も知らぬ武藏野は、今日はな燒きそ若草の、妻も籠れり我も籠れり、此寺の所縁(ユカリ)もよしや義岑公、しづ〳〵と立出給へば、夫と見るより上生阿闍梨、ハット敬ひ奉る。

と云ふ文句である。

近古までの和歌は既に掲げた。降つて近世の和歌や狂歌等の文學を一瞥しよう。特に江戸の歌人には、興趣の饒(ユタカ)な歌を詠んだ者が多い。是皆實地に其の風光に親しんだ爲である。

戸田茂睡

戸田茂睡撰の鳥之迹に、

野月　　山名玉山入道

武藏野の草の葉分に見えそめて露よりのぼる秋の夜の月

諸國行脚しける時武藏野より富士を觀て　　梨本茂睡

むさし野をかこはぬ庭にしめおきて富士の高嶺を築山に見ん

奔放の風調の見るべきものがある。

賀茂眞淵

眞淵の賀茂翁家集に、

枯野

筑波嶺のみどりばかりをむさし野の草のはつかに殘す冬かな

雪中眺望

雪はるゝ朝けにみればふじのねの麓なりけりむさし野の原

加藤枝直のあづまうたに、

武藏野をふりさけみれば秩父嶺に春日かげろひ霞たなびく

遠山霞

八月十五夜月を見てよめる歌並に短歌

あもりつく、富士の高嶺に、たゞ向ふ、武藏の國は、大君の、遠のみかどと、大殿を、高知りまして、天の下、まをし給へば、少女ども、少女さびすと、手にまける、玉川の水、萬代に、たゆることなく、秩父嶺の、五百津いはむら、動きなき、國のほ見えて、野を廣み、此の月ごろぞ、ひきのぼる、たつのみ馬も、此の野らゆ、ひくといはずや、江を廣み、日並のみけに、そなふべき、狹(サ)はた廣はた、此の江らに、いさりもつきじ、春されば、小岫(ヲグキ)を、

りに、さく花を、見つゝぞしのぶ、秋されば、隈なき空に、てる月を、めでゝぞ思ふ、昔より、きかずぞありし、谷具久(タニグク)の、さわたる極み、しほなわの、とゞまる限、かくばかり、まつろひなびく、御代のためしは。

反歌

かもめすむ江を廣みかも照る月の秋の夜渡る影ののどけき

眞萩咲く野を廣みかも秋の夜はくだちゆけども月はかくれず

此の長歌は、武藏野に關する傳來的趣味を悉く匯合せしめて、頗る興の有るものである。

同千蔭

枝直の子なる千蔭のうけらが花に、

名所春曙

ほの〴〵と明けゆく空も紫に匂ふや春のむさし野のはら

八月十五日

障るべき山の端もなきむさし野は月みるための所なりけり

野月露深

武藏野や露わけ行かむ方もなし草は皆がら月になりつゝ

又清水濱臣編近葉菅根集に、次のやうな千蔭の長歌がある。

子日の遊をよめるうた

靑丹よし、奈良の都の、大宮に、百の司を、めしつどへ、集へ給ひて、豐明、きこしめしつゝ、初春の初子のけふの、玉はゝき、とる手もゆらに、賜へりし、昔おもほし、玉敷の、たひらの宮の、外面なる、北野の野べに、みゆきまし、小松が原に、大御輿、とゞ

め給ひて、君も臣も、酒みつぎして、遊ばしゝ、古き例は、かけまくも、ゆゝしきかもよ、今の世に、けふとしいへば、打日さす、都の外の、天ざかる、鄙人すらに、白妙の、袖ふりはへて、畏きや、君が御代〳〵、八十つゞき、都筑が原に、八百萬、萬代かけて、君をほぎ、我身をいはひ、もののふの、八十氏人も、はく太刀の、組の緒しでゝ、遊ぶなる、今日の子の日は、世々にたえせじ。むさし野のつゞきが原に打群れて小松ひくなるけふのたのしさ

同書に、藤原美樹（ウマキ）の長歌も見えてゐる。

藤原美樹

詠雪

秋すぎて、冬し來ぬれば、ふく風も、日にけに寒く、をちつ日も、きぞもくもれり、けふもかも、雪はふらなむ、遠白き、野にうち

いでて、ふる雪に、雪の遊せむと、ますらをの、友がきつらね、
駒なべて、武藏野の原に、我は來にけり。
あま雲の晴るゝまに〳〵武藏野はみながら雪になりにけるかな

田安宗武

田安宗武の天降言（アモリゴト）に、

薄

むさしのを人は廣しといふ我はたゞ尾花分過る道とし思ひき

これは格調に一特色が認められる。

松平定信

宗武の子なる松平定信の三草集に、

月をよめる

むさし野は露を光の海原や月も尾花の浪にたゞよふ

こなは譬喩が面白い。

武藏野の晝

不二は雪箱根は時雨行雲のはては夕日のむさし野の原

これは景情共に曠濶の概がある。定信の歌に就いて記した序に附加したいのは、山崎美成の閑室漫錄に、江城中秋良夜詩歌として、定信の歌を筆頭に數々あるが、中に左のやうなのがある。

むさし野やわきてくまなくすむ月の光にもらぬ露のことのは

牧野備前守忠精

むさし野のかげぞくまなき富士のねの高きは今宵月の名にして

石野遠江守廣通

むさし野の尾花が末の白雲も月にさはらぬ今宵なりけり

勝田安藝守元忠

それから同書に、近衛内大臣殿御詠とて難題の歌が数首出してある中に、むさし野のふねと云ふのがあるから、これも序ながらこゝに収めて置かう。即ち

三日月のふねを追手の風ふけば尾花なみよるむさし野の原

といふのである。

本居翁父子の歌では、宣長の鈴屋集に、

野径月

うかれてもはてはある夜の月影にわけもつくさぬ武藏野の原　　本居宣長

羇中野

草枕おき別れてはゆきくれてむすぶもおなじむさし野の原

春庭の後鈴屋集に、　　本居春庭

武藏野月

夕風にさわぐ尾花の波間より光ほにいづるむさし野の月

熊谷直好

野草花

七草の外にもあまた咲く花の數限無きむさし野のはら

熊谷直好の浦の汐貝に、

野月

むさし野の草にも月に入りにけり山の端をのみ恨みつるかな

横山由清

此は想も面白く、調もよい所がある。宣長など江戸以外の人のは、單に題詠に過ぎないのもあらう。

降つて、後の人のでは、次の如きものがある。横山由清の月舍集に

野外霞

武藏野の野末霞めるけさ見れば春の寒さもはてはありけり

三條實美

三條實美の梨のかた枝に、

　江戸のひらけて三百年になれる年の秋

武藏野の尾花を出でし月影も今は都とてりわたりけり

岩倉具視

岩倉具視の岩倉贈太政大臣集に、

　野殘雪

とりがなくあづまよりくる春ながらなほ武藏野は雪ぞ殘れる

俳諧

轉じて俳諧の方面で逸し難いのは、雪中庵蓼太の武藏野三歌仙であらう。蓼太は天明三年の季秋、門弟を伴なつて武藏野を探り、堀離井、武藏野、逃水を題として、歌仙（三十六韻）の催のあつたのが是である。

又、狂歌の方面では、次の如きものがある。古今夷曲集に、

富士のねを自然枕にせん人の足をのばさば武藏野の原　　法橋由己

臺の物に山を駿河の富士ならば武藏野をこそ盃にせめ　　行風

狂言鶯蛙集に、

野月　　手枕歌種

武藏野は元より廣きはらなればくもなくうみし桂をのこ子

此は品の惡くない作である。石田未得の吾吟我集には、

眺めやる末の草葉に雲とぢて天地和合や武藏野の原

盃の名に流れたる武藏野に富士をたゞへば蓬萊の花

狂歌

などがある。此の武藏野の盃の事は、曉晴翁の雲錦隨筆卷一に、

攝河近郷の方言に、集會の酒宴闌に成、既に盃を納んとなすに及んで、客より主に乞て、最早武藏にして納め給へといふ事を例とす。按ずるに、古代の作に武藏と號し大盃ありて、內一面芒(スヽキ)の描(マキ)金(エ)を書たり。正しく此武藏野を順盃にして納め給へと言しを、後世略して武藏といひ、又其風(ナラ)ひにて、今様の盃の大なるを出して、納(トリ)の盃となすをも武藏と言へるなるべし云々。

と述べて、圖をも出してゐる。これで大盃である事が分り、其の意は、節用集大全に、「武藏野酒盃大者曰二武藏一也言野見不レ盡之意也。」とあるので、飲み盡さずの酒落に出てゐる事も知られる次第である。瀧亭鯉丈の和合人(天保比の作)の初編の冒頭にも、「大盃を武藏野と號(ナツケ)しも、野見(呑)盡されぬといふ

謎にして、廣々と草深かりしも云々。」とあるのがやはり其の事である。又此の序に、同じやうな洒落が尚一つ思ひ合せられる。それは烏亭焉馬撰の開卷百笑に在る吾友軒米人作の茶漬といふ文である。

武藏野御茶漬といふ見世を出して、殊の外うれる。友達が來て、コレきつい繁昌だげな、時に障子にむさしの御茶漬とかいたが、ちつとむりだと思ふ。アノ茶漬の始りは、淺草に海道茶漬といふが有た。夫から銀座町へ山吹茶漬がお茶漬の始り、宇治の茶に山吹といふが有からこきえたに、むさし野に茶があつてつまる物か。成程さういふは尤だが、おれも海道茶漬が有から、木曾海道茶漬としようとおもつたが、一度でこり〳〵せうと思つて、むさし野とつけた。心ははら一ぱい喰せる思月さ。

蜀山人のめでた百首夷歌に、

野

名にしおふお膝元ゆゑむさし野の原は皆がらめでたしとみん

武藏野

花すゝき邦幾千里のむさし野は招かずとても民のとゞまる

此の如き狂歌の多くは、古歌の興味を基として詠み出たもので、而も洒々落々たる太平の民の思想を反映したものと見なければならぬ。

三　紀行に現れた武藏野

和歌が動もすると、題詠の弊に流れ、所謂歌人は坐らにして名所を知り、直觀に愬へないで、或は想像を走せ、或は古人の思想を蹈襲するに比し、旅行記の文は、實際に其の地を踏んで、其の景を敘べたものであるから、寧ろ採るべき所が多く、隨つて興趣も深いのを覺える次第である。

更科日記

菅原孝標の女の更科日記に、上總から京に上る途中の事を記して、

今は武藏野の國になりぬ。ことにをかしき所も見えず。濱の砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて、紫生ふときく野も、あし荻のみ高くおひて、馬にのりて弓もたる末見えぬまで高く生ひ茂り

て、中をわけ行くに、竹芝といふ寺あり。

とあるのは、紀行文に現れた最古の徴證であつて、紫草の事を云つたのは、古今集の歌を想ひ起しての事であらう。さうして蘆荻の高く生えたさまも能く寫し出されてゐる。

降つて宗久（俗姓平吉、初、大炊助と曰ふ、或は大友兵部少輔賴資と曰ふ）の都の苞（ツト）と云ふ觀應の比の紀行には、甲斐から常陸へ行く折、武藏野で盜難にかゝつたことを記してゐる。さうして伊勢物語の故事を引用してゐるのを見る。

武藏野のはてなき道に行きくれて、その夜は道づれの僧などあまたありしも、皆假初の草の枕をむすびてとゞまり侍りし程に、此の野は昔も盜人ありてこそ、けふはな燒きそとも詠まれけると聞

きしかど、さまでやはと思ひしに、苔の衣をさへひきてかへりし白波の荒かりし名殘に、いとゞ旅の床も物うくこそ侍りしか。

いとはずばかゝらましやは露の身の憂にも消えぬ武藏野の原

堯惠法印(堯孝法印の門下)の文明十七、八、九年の北國紀行には、興味の有る記事があるから、次々に說明を加へて摘錄しよう。

北國紀行

十二月(文明十八年)のなかばに、武藏野へ移りぬ、曙をこめて、ちやうのはなといふ所をおき出、行衞もしらぬ枯野を駒にまかせて過侍るに、幾千里ともなく霜に曇りて、空は朝日の雲もなく、さしあがりたる風景肝にめいじ侍しかば、

朝日かげ空はくもらで冬ぐさの霜にかすめるむさし野の原

右は上野の佐野舟橋の記事の續である。ちやうのはなは大里郡幡羅村

であつて、昔は應鼻の祖郷と云つたさうである。

其夜は箕田といふ所に明して、武藏野を分侍るに、野徑のほとり、名に聞えし狹山(サヤマ)有。朝の霜をふみ分て行に、纔なる山のすそに、かたち計なる池あり、

氷ゐし汀の枯野ふみ分て行ばさ山の池のあさかせ

箕田は北足立郡で、吹上と鴻巣との間に位する。狹山は大里郡三ヶ尻(ミツリ)村の野中に立つてゐる。池は少間池(サヤマ)とも書いて、山の近くにある。多摩郡のではない。

其日の半より、漸々富士はみえ侍りぬべきを、よるの霜なごりかきくもりて、かぎりもしらず侍り。からうじて鳩が井のさと滋野憲永がやどりにつきぬ。二十日のよの殘月ほがらかに、かれたる

草の末に落かゝりて、朝の日叉東の空より光計ほのめきたり。富士蒼天にひとしくして雪綠をかくせり。唯それならむと思ふに、忙然として大空にむかへり。

けさみればはやなぐさみつふじのねにならぬ思ひもなき旅の空

鳩が井は北足立郡鳩谷（ハトガヤ）である。日光街道に當つてゐる。

五日〔文明十九年正月〕立春

春はけふたつともいはじむさしのや霞む山なきみよし野の里

三芳野は、彼の伊勢物語に入間の郡、とあるものである。

同月の末、武藏野の東の界、忍岡に優遊し侍。鎭座社五條天神と申侍り。をりふし枯たる茅原を燒侍り。

契り置て誰かは春のはつ草に忍びの岡の露の下もえ

並びに湯島といふ所有り。古松遥にめぐりて、しめの内に武藏野の遠望かけたるに、寒村の道すがら野梅盛に薫ず。これは北野御神と聞えしかば、

忘れずば東風吹きむすべ都まで遠くしめののそでの梅が香

五條天神及び湯島天神の事の見えてゐるのは、頗る注目に値する。

同廿八日〔文明十九年六月のこと〕武藏野のうち中野といふ所に、平重俊といへるが、催しによりて、渺々たる朝露をわけ入て瞻望するに、何の草ばの末にも唯白雲のみかゝれるをかぎりと思ひて、又中やどりの里へ歸り侍りて、

露はらふ道は袖よりむらきえて草ばにかへるむさし野のはら

漸く日高くさし昇りて、よられたる野草の原を凌ぎくる程、暑さ

しのび難く侍りしに、草の上にたゞ泡雪のふれるかとおぼゆる程に、ふじの雪うかびて侍り。

夏しれる空やふじのね草のうへの白雪あつき武藏野の原

ほりかねの井ちかき所にて、

そことなく野はあせにけり紫もほりかねのゐの草ばならねど

廻國雜記

同じ比の道興准后（藤原兼嗣の裔で、大僧正、准三后、聖護院、新熊野撿校。）の廻國雜記（文明十八年）には、武藏に關する記事が甚だ多い。依つて此も說明を加へて、こゝに摘採しよう。

武藏野にて殘月を眺めて、

山遠し有明のこる廣野かな

おなじ野をわけくれてよめる、

草の原わけもつくさぬむさし野のけふの限はゆふべなりけり

この夜はこの野に假寢して、色々の草花を枕にかたしきて、少しまどろみ夢の覺めければ、

花散て草の枕の露のまに夢路うつろふ武藏野の原

武藏野の草にかりねの秋の夜は結ぶ夢路もはてやなからん

岡部の原といへる所は、かの六彌太といひし武夫の舊跡なり。近代關東の合戰に、數萬の軍兵討死の在所にて、人馬の骨をもて塚につきて、今に古墳の數多侍りし、暫く回向してくちにまかせける。

なきをとふをかべの原の古塚に秋のしるしの松風ぞふく

むら君といへる所を過るとて、

たが世にかうかれそめけん朽果てぬ其名もつらきむらきみの里

岡部は大里郡で、村君は北埼玉郡である。

牛澤といへる所にやどりて、發句

　水なかば澤べをわくやうす氷

名に聞し霞の關を越て、是彼歌よみ、連歌など言捨けるに、

　吾妻路の霞の關に年越えば我も都に立ちぞかへらむ

　都にと急ぐ我をばよもとめじ霞の關も春を待つらむ

此關をこえ過て、戀が窪といへる所にて、

　朽果てぬ名のみ殘れる戀が窪今はたとふも契ならずや

牛澤は南多摩郡關師（ツシ）の小名である。霞の關が關戸の地であることは前に考證した。

むねをかといへる所を通り侍りけるに、夕の烟を見て、

夕けぶりあらそふ暮を見せてけりわが家々のむね岡の宿

堀兼の井見にまかりてよめる、今は高井戸といふ。〔編者云、今は云々は疑はしい語である、別人の筆かも知れぬ。こゝは前後入間郡の事を云つてゐるのである。高井戸は今の豊多摩郡である。〕

俤ぞかたるに殘るむさしのやほりかねの井に水はなけれど

昔たれ心づくしの名をとめて水なき野べをほりかねの井ぞ

やせの里はやがて此續きにて侍り。

里人のやせといふ名や堀かねの井に水なきをわびて住らん

宗岡や八瀬などは入間郡である。

これより入間川にまかりてよめる、

立よりてかげをうつさば入間川わが年波もさかさまにゆけ

此の次に、佐西の觀音寺の事、黑須川の鵜飼の事、大塚の十玉が坊での詠吟の事等が見えてゐる。此の大塚も入間郡で、今の南畑村である。河越といへる所に到り、最勝院といふ山伏の所に一兩夜やどりて、

限あればけふ分盡す武藏野の境もしるき河越の里

これは河越を以て武藏野の境と認めてゐた樣子が想はれる。

うとふ坂といへる所にてよめる、

うとふ坂こえて苦しき行末をやすかたとなく鳥の音もがな

すぐろといへる所に到りて、名に聞し薄など尋てよめる、

旅ならぬ袖もやつれてむさし野やすぐろのすゝき霜に朽ちにき

善知鳥坂は河越の附近仙波村の內である。勝呂も今村名が存してゐる。

此あたりに野火留の塚といふ塚あり。けふはな燒きそと詠せしに

よりて、烽火忽にやけとまりけるとなむ、それより此塚をのび留
と名づけ侍るよし、國の人申侍ければ、
わか草のつまもこもらぬ冬されにやがてもかるゝのびとめの塚
野火止は今の大和田である。
これを過て、ひざをりといへる里に市侍り、暫くかりやに休て例
の俳諧を詠じて、同行に語り侍る。
商人はいかで立らん膝折の市に脚氣をうるにぞ有ける
脚氣と云つたのは、膝折といふ語から興じたのであつて、椀を盛る籠
即ち脚籠をカツケと云つて、此の地で賣り販ぐのを詠んだのである。
新編武藏風土記稿に其の圖を出してゐる。
ところ澤といへる所へ遊覽に罷りけるに、福泉といふ山伏、観音

寺にて竹筒出しけるに、薯蕷といへる物肴にありけるを見て、俳諧

野遊のさかなに山のいもそへてほりもとめたる野老澤かな

此所を過ぎて、くめ〳〵川と云ふ所侍り。里の家には井なども侍らで、唯此河を汲みて、朝夕用ひ侍るとなん申しければ、

里人のくめ〳〵川とゆふぐれになりなば水はこほりもぞする

（イこそせめ）

武藏野に出て酒など飲て遊びけるに、始て雲雀の揚るをみて、

水草の一もとならぬむさし野におつるひばりも床まよふらん

武藏野の末に濱崎といへる里侍り。かしこにまかりて、

武藏野を分けつゝゆけば濱崎の里とはきけど立波もなし

膝折や濱崎は北足立郡である。以上に據つて、作者の足跡の遍き事を見るであらう。尙、淺草、小石川、芝の浦なども見えてゐるが、今一々こゝに掲げない。因みに、此の廻國雜記には、關岡野洲良（ヤスラ）の標註（文政八年の自序がある、刊本二冊）があつて、地理や品物を解說してゐる。宜しく參照せられたい。

次に宗長（連歌の名家、駿河島田の人）の東路の津登と云ふ永正六年の紀行には、こんな事が書いてある。

八月十一日、武藏の國勝沼といふ處にいたりぬ。三田彈正忠氏宗此處の預主たり。かねてしも白川の道々の事申通はし侍しかば、こゝのやすらひ十五日に及べり。連歌度々有。

きりはたゞ（イけさ）わけ入八重の外山かな

此山家、後は甲斐の國の山、北は秩父といふ山につゞきて、誠の深山とはこゝを申すべからむ。此山深き心なるべし。同じ處に山寺あり。前は武藏野なり。杉本坊といふにして、

露をふく野風が花に朝ぐもり

武藏野の景氣ばかり也。

同十五日、氏宗、同じく息政定、これかれ駒打並べ、武藏野の荻薄の中を過行がてに、長尾孫太郎顯方の館はちがたといふ處に着きぬ。政定馬上ながら口遊(クチスサ)びに、

むさし野の露の限は分もみつ。秋の風をばしら川の關

此の比、越後國鉾楯により、武藏、上野の侍進發の事有て、いづこも靜ならざりしかば、ひと夜有て、翌日日たけて、長井の誰や

らんの宿所へと送らる。夜に入て落着ぬ。

右に山寺とあるのは、今の西多摩郡霞村なる鹽船觀音堂の事であつて、杉本坊といふのは、其の別當で、其の家は今も存してゐる。鉢形は荒川を隔てゝ、寄居（ヨリキ）の南に在る。右の文意によると、いかにも兵馬倥偬の狀が想ひやられる。又、

鉢形のたちにして、

霜をへん生さきしるし松の千代

馬庭豊前守重直興行せし也。顯方いまだ少年行末遙なる事を賀し侍る計也。又一座興行發句、顯方にかはりて、

さえし夜をかさねてけさや薄氷

連歌果て、酒など有て夜更侍りし也。當城逗留の旅宿隨意軒とい

ふにして、

神無月くれざりし秋か宿の菊

庭の菊秋を殘せるさま成べし。鉢形を立て須賀谷といふ所に、小泉掃部助の宿所に一日休らふ。人數はなくて懷紙表八句、

冬枯や萱が下葉の秋の風

武藏野の東野中の程なるべし。霜枯の景氣ばかり也。あたりの平澤寺にして、

こほりけり松にうごかぬ岩根水

本尊は不動尊、池にふりたる松有。又勝沼につきぬ。

菅谷(スガヤ)村は比企郡であつて、平澤寺は其の村に在る。

谷宗牧の東國紀行に、江戸城の富士見の亭や、菀玖波山の亭での武

藏野眺望を記した一節がある。隅田川や淺草觀音の森の見える事も書いてある。此は天文十四年三月の事である。其の文章は略して置く。

武藏野の紀行

北條氏康（長氏の孫で、氏綱の子である。）の武藏野紀行といふ文がある「天文十五年仲秋の比、武藏野をみんとて、此年月思ひ立ちぬる事なれば、人々あまた打連て、小鷹狩して遊ばむとて、皆々狩の裝束して、馬に打乘り、まづ鎌倉に詣でける。」と書き起して、武藏野を狩り、隅田川を渡り、小田原に引返した由を記してゐる。

此は八月上旬、朝霧深く分入て行に山あり、いは山といふ。此山の後は甲斐の山、北はちゝぶなど申侍る。それより武藏國勝沼と云所に着ぬ。齋藤加賀守安元此所の領主たり。常々道々の事申通はしければ、山海の珍物數を盡し饗應しける。此所に二月逗留して、

それより武藏野を狩りゆくに、誠に行けどもはてのあらばこそ、萩、芒、女郎花の露にやどれる蟲の聲々、あはれを催すばかりなり。むさし野といづくをさして分入らむ行くも歸るもはてしなければ

古の草のゆかりもなつかしければなり。これも紫の一もと故なるべし。

へだつなよ我世のなかの人なればしるもしらぬも草の一もと

明くれば八月十三日朝霧彌々深くして、道もさだかにみえわかず。馬にまかせて行、長井の庄にも着ぬ。誠や若紫の卷に、かゝる朝霧をわけ入らんとあるもこれなるべし。

前に引いた宗長も、又此の氏康も、共に勝沼の事を言つてゐる。其の

故田中義成氏の說

地は今の青梅町の內である。抑〻氏康が文雅風流の士である事は、北條五代記などに稱揚してある如くで、又野史にも、氏康に此の紀行の存する事を云つてゐるのであるけれども、雜誌歷史地理第一卷第四號の故田中義成氏の考證に據ると、此の紀行は前の東路の津登に據つて後人が書いた僞作であると認めなければならぬやうである。其の論據として、路順の記述が全く地理を失してゐる點、又三田氏は世々勝沼に居り、永祿六年綱秀の死まで渝らない事は、天寧寺の大永元年の鐘銘や金剛寺の三田氏の位碑の裏書などの證があるから、齋藤加賀守安元を此の時の領主とするのは、歷史上認めることの出來ない點等六條を擧げてある。之を思ふと、此の紀行の文は記敍徐に略に過ぎ、詞藻も亦熟してゐるとは云ひ難い。怖らくは氏康の詠歌を本として、別人

が補綴したものであらう。

日光山紀行

藤原（烏丸）光廣の日光山紀行と題する東照權現御遷座の記に、二十三日〔元和三年三月のこと〕は山の端しらぬむさし野にわけいらせ給。草より出るは月のみかは。あかねさす日も同じ。萱生よりかげのどかに、霞にもるゝ春のながめえもいはず。（中略）堀かねの井は右にみてとほる。決定知近水、心にうかぶべし。

とある。原上の太陽に就いて記したのは、亦注目しなければならぬ。蓋し實景から得た感に違無からう。

俳人の文

俳人で旅行家である。大淀三千風の日本行脚文集は、其の遍歷する所、海内の名區に亙り、文章も亦暢達である。武藏野を往返したことが數次に及んだ由が見えてゐる。降つて横井也有の鶉衣に、武藏野紀

鶉衣の武藏野紀行

行がある。是も亦古歌の趣味を基本として書いた物である。

庚申〔元文五年〕のことし、霜月のはじめなりけり。江戸を出でゝ清戸といふ處に、旅より旅の假寢も十日餘り、母やある、子やもてると、あるじに咄もやをら馴染みそめて、此のあたりの事など尋ね聞くに、昔はこゝもとも月の名に負ふ武藏野なりしよし、今は家連なり、田畑と變じて、露おく草にもあらぬ大根牛蒡の殊にめでたき里なりと語る。

武藏野や今は茶にたく枯尾花

今とても猶端々には、其廣き野の迹殘れりと聞きて見にまかりける。案内する男の聾なるも、時鳥きくしるべならねばと、其の日の興にして、龜が谷、下留などいへる村々を過ぎて、かの野には

出ぬ。誠に四方の木竹もなく、草さへも今は霜枯れはてゝ、あはれに物すごき原のさま也。

武藏野やいづこを草のかげひなた
そこら見めぐりて、
枯野にもすゝきばかりは薄かな
くれゆく空も思ひやりて、
武藏野に露ひとつなし冬の月

又の日、野火留といふ所を尋ね侍り、こゝは伊勢物語に今日はな燒きそと詠みし跡なれば、里の名もかく呼び侍るとか。業平塚とて、さびしきしるし今も殘れり。歌の心を知らば、枯草に吸殼な捨てそと戯れて、

こもるかと問へば枯野のきりぐ〱す

以上列載した諸家の文を通観するに、畢竟古歌の興味を以て、歌枕名所を尋ねるのを主としてゐる。さうして概ね剴切な觀察と、精密な叙景とに乏しい點は、遺憾としなければならぬ。けれども自然を愛し、風雅を好み、能く塵寰を脱して吟行を事とした古人の述作が、此の如く傳存する事は、決して閑却してはならないと思ふ。

四　餘　言

古は單に草莽の曠野として認められ、和歌の題目としては、或は野草を詠じ、或は秋月を興じたのである。後漸く風流の士の往返する所となつては、歌謠上の名所は、紀行の材ともなつたのである。元來東

國の邊陬として、京洛の搢紳には、好奇の情を以て遇せられてゐたのであるが、時勢の推移は、遂に此の野の末の開けて、江戸となり、東京となるに至らしめた。吾人は古來の文學に對して、頗る今昔の感を深うするものがあると共に、ひたすら昭代の惠澤を懽ばなければならぬのである。

第二篇　隅田川

一　隅田川の水系及び名稱

武藏國の勝概を說くものは、何人も隅田川を思ひ浮べないといふはなからう。北野菊塢の墨水遊覽誌に、

そもそもすみだ川は、武藏國秩父郡中津川を水源として、それより、秩父の諸水相會し、榛澤、男衾、大里、足立、横見、入間、新座、葛飾、豊島の諸郡をすぎて、凡三十四五里の長流なり。水上を荒川といふは、秩父大瀧より出るゆゑなり。すみだ川といふは、荒川より淺草川までをいふ。淺草川のするは、兩國川より品川の海へながれ入る也。

とある。幸田露伴氏の蝸牛庵夜譚に、東京の水系を詳述した中にも、

隅田川とは隅田（スダ）を流るゝを以て呼ぶことなれば、隅田村以上千住宿あたりを流るゝをば千住川と呼び、それより以上をば荒川と呼ぶ習ひなり。水源は秋の日など隅田堤より遠く西の方に青み渡りて見ゆる秩父郡の山々の間にて、大瀧村といへるが、北の川の最上流に位する人里なれば、それより奥は詳しく知れねど、おもふに甲斐境の高山幽谷より出で來るなるべし。

川名

とある。川名の由來は、既に冤嶠陳人の武藏名所考（文政七年刊）にも、

按ずるに、隅田川は葛飾郡に隅田村といふ地ありて、そこに渡口あるゆゑに隅田川と稱したるを、通じて此川の名とは呼びけん、猶

戸田村の渡のほとりにては、戸田川といひ、淺草のほとりにては淺草川といふが如し。又宮戸川といへるも、今の三谷といふ所、昔もみやとゝと唱へけん、それがゆゑに此名ありしにや。又水上を荒川といふは、大瀧より出づるゆゑ也。

と云つてゐる所である。此の隅田の語源は、確に考へ難いけれども、後に私見の一端を述べよう。

抑ゝ隅田川の水系は、古來變遷を經たものである。故吉田東伍氏の刀禰川澤志の説が頗る要を得てゐる。

隅田の水名は、三代格、承和二年官符に、武藏下總兩國堺、住田河、崖岸廣遠、不レ得レ造レ橋、四艘、元二艘、今加二二艘一云々とあるを初見とす。今は此水、秩父入間の合流より成りて、專ら千住

驛より下に隅田川と云へど、昔は太田庄、下河邊庄の利根を承けて、猶遠く隅田川とも呼ばれしなり。且千住、戸田の方より來會するものを、入間川と云ひ、秩父荒河の河道も古今の大變を經たり。〔類聚三代格の原文は、書式が右の引用文とは異なつてゐる。〕

とある。即ち義經記に、利根川、末に下つてすみだ川と名づくと記し、又關八州古戰錄にも「淺草川ハ豊島郡ノ千束ノ庄ノ内ニテ、水上ハ利根川、入間川、荒川ノ三流ニ續ケリ。」と云つてゐるのは、故の無い事ではない。

他國のすみだ川

序乍ら附記して置かうと思ふのは、元來すみだ川と稱する川は、他國にも存することである。紀伊國に存するといふものは、次の萬葉集卷三の辨基の歌で名高いのである。

亦打山暮越行而廬前之角田河原爾獨可毛將宿（マツチヤマユフコエユキテイホサキノスミダガハラニヒトリカモネム）

此の待乳山、庵崎、角田河に就いて、紀伊續風土記の伊都隅田莊の條下に、

待乳山今大和に屬す。紀伊の界古今の別ありて、所謂信土山は古は兩國の界なり、故に古人其地を紀州とも和州ともいふ、今其大和宇智郡に屬するより、後人古今堺の別なる事を知らず、古人の詠歌と合はざるより區々の説あり、皆誤なり。待乳川は今の堺川なり角田川は堺川合流の所より、相賀莊妻村領烏帽子岩までの間隅田莊中紀ノ川の流をいひて、別に川あるにあらず。或は今の堺川の事とすれども、堺川は萬葉集に見えたる待乳の山川にて、隅田川原などいふべき川原にあらず、疑ふらくは誤なり。（以上摘錄）

と云ひ、庵崎は芋生村（イモフがイホに轉じたのであらう。）の出埼の義であらうと説いてゐる。此の萬葉集所見の地名からして、同名の川の緣で、武藏の方にも、待乳山や廬崎などの名所を生ずるに至つたや

うである。關八州古戰錄に、

牛島ト云ヘル地ヲ廬崎ト呼來レリ。金龍山ト唱フル岡ヲマッチ山ト云習ハシ侍ルモ、イツノ頃ヨリ好事ノ者ノ偕稱シタル業トモシラズ。

と云つてゐる、（金龍山の謂はれに就いては、江戸雀や增補江戸咄に一二の俗說を傳へてゐる。）併し此は既に建保三年の內裏名所百首〔後に出す〕にも見えてゐるのであるから、極めて古い事である。

尙、夫木和歌抄を見ると、すみだ川は駿河、大和、伊勢、出羽にもあると註してある。

二　文學に現れた隅田川

以下略時代の順序を逐うて、隅田川の國文學にあらはれた跡を辿つて見よう。其の初は伊勢物語や古今集などからである。伊勢物語に、なほゆき／＼て、武藏の國としもつふさの國とふたつが中に、いと大きなる河あり。その河の名をば隅田川となんいひける。その河のほとりにむれ居て、思ひやれば、限なく遠くも來にけるかなとわびをれば、わたしもりはや船に乘れ、日もくれぬといふに、乘りて渡らむとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりに、白き鳥のはしと足と赤きが、鴫の大きさなる、水のうへに遊びつゝいををくふ。京には見えぬ鳥なれば、

皆人見しらず、渡守に問へば、これなむ都鳥と申すといふを聞きて、

名にしおはゞいざことはむ都鳥我がおもふ人はありやなしや

と

とよめりければ、船人〔流布本には、人の字が無い〕こぞりてなきにけり云々。〔群書類従本に據る、其の他の本は字句に異同がある。〕

古今集

とあるのは、文學上最古のものである。之を古今和歌集には、巻九羇旅歌に、在原業平朝臣として、次のやうに出てゐる。

武藏國と下總のくにとの中にある隅田川のほとりに到りて都のいとこひしうおぼえければ、しばし川のほとりにおりゐて、思ひやれば、限なく遠くもきにけるかなと思ひわびてながめをるに、渡

守、はや舟にのれ、日も暮れぬといひければ、舟にのりて渡らむとするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なくしもあらず。さる折に白き鳥のはしと足と赤き、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、皆人見しらず、渡守に、これは何鳥ぞと問ひければ、これなむ都鳥といひけるを聞きてよめる。

との詞書を以て、右のと同じ歌がある。尙此の故事を源隆國の今昔物語にも載せてゐる。重複の嫌はあるが、文章比較の參考に資さうと思ふ。其の卷廿四、在原業平中將行ニ東方ニ讀ニ和歌ニ語第三十五に曰く、

(前略)尙行々テ武藏ト下總トノ中ニ大ナル河有リ。其ヲ角田河ト云。其河邊ニ打群居テ思遣レバ。无ニ限リ遠ク來ニケルカナト侘思ヘルニ。渡守早ク船ニ乘レ日暮レヌト云ヘバ。乘テ渡ラムト爲

ル程ニ。皆人京ニ思フ人无キニシモ非デ侘思ケリ。而ル間水ノ上ニ鴫ノ大キサ有ル白キ鳥ノ觜ト足トハ赤キ。遊ツヽ魚ヲ食フ。京ニハ更ニ不見エ鳥ナレバ人モ不見知。渡守ニ彼レハ何鳥トカ云フト問ヘバ。渡守彼レヲバ都鳥ト云ケレバ。業平此ヲ聞テ此ナム讀ケル。

（こゝに前のと同樣の歌がある。）

船ノ人皆此レヲ聞テ擧テナム泣ケル。（下略）

此の樣に最古の物語と勅撰集とに現れたから、文學上の典據として、後世の歌文に影響したことは甚大である。扨右に見えてゐる所で、隅田川が武總兩國の界である事は、明かである。服部南郭の「兩岸秋風下二州」と賦したのも、これがためである。兩國橋の名の存する由

來も、こゝにあるのである。抑々葛飾郡は延喜式には武藏に載せないで、下總十一郡中の一である。和歌類聚抄や色葉字類抄や拾芥抄も亦皆同樣である。大橋方長の武藏演露に、北條分限帳、武州古圖に出す所にも、葛飾郡は無いと云つてゐる。古昔葛飾の地が、今のやうに武藏に分屬したのでない事は、無論である。併し現今は江戸川を以て國界としてゐる。それで此の變遷は、果していつ頃からであらうか。高田與清の松屋棟梁集の説を摘記しよう。

高田與清の説

八雲御抄、夫木抄、松葉名所集、歌林名所考、袖珍歌枕、秋の寢覺などに下總と注せしは、葛飾郡にすみだの里ありて、そこにおこれる河の名なればなるべし。吾妻鏡に、むさしのくにの人葛西の六郎平家物語（長門本）におなじ國人かさいの三郎などいふがあり、

こはその住所の名を族稱にせしなれば、葛西のこほりを武藏に管(スベ)たりしあかしとすべし。建保名所百首、歌枕名寄、新撰歌枕名寄、机右抄、歌枕玉叢抄拔書、角田川謠詞などにも、すみだ川を武藏の名所とせれば、建保の頃より後、こほりも川もむざしの國には隷(ツキ)たる也。勅撰名所和歌抄出、名所方角抄、梅若權現の緣起には、二國に渉れりとす。さてふたゝびもとの下總にかへされけんことは、北國紀行、あづまぢの裹(ツト)、河越記などにいづ。後に今のごとく武藏の郡に定められしは、貞享元祿の間ならんこと、江戸總鹿子大全、瀨田問答、龜戸の善應寺の鐘のことがき、中田氏が家にもたる水帳のうはぶみなどかうがへてしるべし。さればすみだ川ははじめに下總、中ごろは武藏、その後又下總、今はむざしの名

どころ也。

右の中頃は武藏との斷定には、疑ふべき餘地がある。瀨田問答（太田覃人）の問に、瀨田貞雄の答ふ）の所說は、左の通である。

兩國ヨリ東ノ方、本ハ下總國葛飾郡ナリシヲ、元祿ノ頃豐島郡ニ被ㇾ改テ、武藏ニ屬セシト云、元祿ハ何年ニ候哉。

答曰。何レノ書留ニモ元祿ノ初ト計記シテ、慥ニ年月ヲ記サズ候。此事其所ノ百姓抔ヘ御觸有テ、本所ヲ武藏ト書出候事、御郡代伊奈氏ノ舊記抔ニハ慥ニ可ㇾ有ㇾ之ト、數年心掛候ヘドモ、手寄無ニ御座ㇾ打過申候。但御書面ニハ豐島郡ニ被ㇾ改候ヨシ御認候ヘ共相違ニ候。中川ヲ堺トシテ（巴玉曰。中川ニアラズ利根川ナリ、庄內二合半東西葛西領モ、此時ヨリ新武藏トナル。）西ノ方（則本所深

川也）ヲ武藏ノ葛飾郡ト唱ヘ、東ノ方ヲ下總ノ葛飾郡ト申セトノ事ニテ、武藏下總トモニ當時葛飾郡アルハ此故ナリ。

覃後按。本所中ノ郷、林諸鳥（鹽瀨和介）別莊ノ庭ニ建ツル碑有。其文ニ曰。

萬葉集十四下總國歌云。

爾保杼里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能可奈之伎乎刀爾多氏米也母（ニホドリノカツシカワセヲニヘストモソノカナシキヲトニタテメヤモ）

葛飾郡本下總國也。貞享三年丙寅春閏三月。割二利根川西一。屬二武藏國一云。

天明二年壬寅冬十月。林居士諸鳥。得二陸奥國牡鹿郡石一。建レ之

重棟曰。葛飾郡隅田村木母寺ノ鐘ノ銘ニ、豐島郡トアリ、一タビ

豊島共唱ヘシカ、又豊島ノ郡界故誤リシニヤ、此鐘ノ銘ハ近衛信基公ノ文ナリ。

溫知叢書本ノ頭註には、「利根川以西ノ全ク武藏ニ屬シ葛飾ト定リシハ、天和ノ朱印ニ始ル。其以前ハ、武藏下總豊島葛飾錯雜シテ定リナシ。」ともある。

都鳥

偖又上に引いた古文に顯著な一事實は都鳥である。それは蓋し鷗の類であらう。十六夜日記殘月抄卷一に、

（前略）古歌に、海にも河にも濱にもよみ、又色は白くて觜と足とは赤きよしいへるものおほかり。輿清按に　都鳥の說あまたあれど、契沖阿闍梨、季吟法師、眞淵翁などの、伊物の註に鷗（カモメ）といはれしが千古不易の確論なるべし。そは鷗にも種類おほくて、形も

やゝ別(ケヂメ)あり。小野蘭山翁が本草啓蒙ノ四十三に、鷗を筑前にてネコドリ、筑後にてネコサギ、上總にてウミネコ、武藏本牧にてハマネコとよぶよしいへり。これ鳴聲ク猫に似たるがゆゑ也。(中略)さて都鳥のミヤは聲によりておほせ、コドリはよぶこどり、みさごどりなどの小鳥に同じく、大鳥に對(ムカ)へし稱也。貝原篤信が大和本草ノ十五に、西土(ノクニ)ニテ都鳥ト稱スル鳥アリ、背ハ黑ク、腹脇白ク、觜ト足ト赤シ、觜長シ、ケリノ形ニ似テ、其形ウルハシ、伊勢物語ニイヘル都鳥ハ是ナルカ、ともいひたれど、武總下總などの間にさる鳥いとまれ也。伊勢物語の都鳥は決(キハメ)て鷗なる事うつなし。古今著聞集ノ二十に、成季と云者が都鳥を飼て、萬の蟲をくはせし事もみゆ。

と考證してゐる。都鳥の初めて見えるのは、萬葉集巻廿の左の歌である。

布奈藝保布保利江乃可波乃美奈伎波爾伎爲都々奈久波美夜故杼里香蒙

堀江は今の大阪にある。宇津保物語吹上の上に、「渚より都鳥つらねてたつをりに濱千鳥の聲々なくをきゝて、」とあるのは紀州である。後拾遺集には和泉式部が和泉へ下つたをりに、夜都鳥のなくのを聴いて詠んだ歌も見えてゐる。其の他夫木和歌抄を見ると、越の海のを詠んだ源順の歌や、播磨の飾磨に於ける相模の歌や、和田のみさきでの源俊頼の歌なども見えてゐる。阿佛尼十六夜日記にも亦載せてゐる。けれども隅田川といふと、都鳥を聯想するのは、全く伊勢物語に基づくの

である。

更科日記

更科日記には次の記事がある。

野山葦荻の中を分くるより外の事なくて、武藏と相模との中にありて、あすだ川といふ。在五中將のいざ言問はむとよみけるわたりなり。中將の集にはすみだ川とあり。〔編者云、關根正直氏の說に、在五中將云々から此迄は、後人の加筆であらうとのことである。〕船にて渡りぬれば、相模の國になりぬ

此の文意は殊に訝しい。これに就いては、古人で既に說を立てゝゐるものがある。

中神守節の說

中神守節の隅田川考には、荻生徂徠と山岡明阿との之に對する考說を紹介した後、自家の按を下して、此う言つてゐる、

いかさまそのところあないせしものの、多磨川をさして是なん隅田川なりとみだりに敎へしならん。すべて此記を見るに、道すが

らの名たゝる所は、ことゞく沙汰あれど、多磨川のことにおよばず、是らにてもおもひ合するに、多磨川と隅田川のあやまりより、武藏と相模の中とはかきしなるべし。(中略) 殊に女のことなれば、教へしまゝをしるせしなるべし。

是も推測に過ぎないけれども、姑く一説に備へてよからう。ともあれ、こゝにあすだ川の名の見えてゐる事は注意しなければならぬ。又高田與淸は「更級日記に、あすだがはとあるは、あもじ一字あまれるにや、夫木抄に(雜八渡部)すだの河原とも、すだの渡ともよめり。義經記には(三の卷頼朝謀反の條)すんだとも書たり。かゝればすみだとも、すんだともいふ、或はかよはし、或ははぶけることばにて、みな同じ心ばへになんありける。」と云つてゐる。併しアスダは必しも否定し難いであらう。それは又別

稱とも思はれるからである。スダがスンダとなり。更にスミダとなつたのが通稱であらう。今試にアスダの名の捨て難い由の臆説を附加し

アスダに就いての私見

ようと思ふ。天治本新撰字鏡に堋〔異本には坍とある由〕の字が見え、崩岸也と釋き、久豆禮又阿須の訓を載せてゐる。此のアスの語は、萬葉集卷十四に、安受乃宇倣衛とあり、又安受倍可良とあるアズに同じく、東歌に見える詞であるから、古くから東國の方言であつたと思はれる。それでアスダは此の語を含んでゐるのであらうと考へられるのである。故にアスダは却つて古くして、スダは後の略稱であらうかと察しる。とにかく隅や角の字に拘つて、本義を解き難い事と思ふのである。

内裏名所百首

和歌の方面では、建保三年の内裏名所百首に角太河の題詠のあるのが顯著である。

今夜又誰が宿からんいほさきの角田河原の秋の月かげ　女房〔實は順徳院〕

都鳥角太河原に船出しぬさしてとふべき人しなければ　行意

水莖のあとかき流す角太河言つてやらん人もとひこず　定家

たれこゝに角太河原の都鳥みやこ戀ひしきねのみ鳴くとも　家衡

昔さそふ月は雲井に角田河はるかにかなしおもふ都を　俊成女

都にてなれし月さへすみだ川言とふ鳥のうき音のみかは　兵衛内侍

月かげのさすやいほさき角田河越えてまつちの山のかひより　家隆

なか〳〵に我にこととへ都鳥すむや河邊の外はこたへむ　忠定

角田河なにたつ鳥の都にはまつらん月を惜しむ山のは　知家

名にし負ふ鳥に言とふ角田河昔のなみのあとをとひつゝ　範宗

忘るなよなれのみこゝに角田河我が思ふことの鳥の名もうし　行能

渡守しばしやすらへ角太河ぬれぬといはゞ暮を待つらむ　康光

右には、庵崎や待乳山が皆河畔の名所として詠ぜられてゐる。

夫木和歌抄には、すだの渡を下總として出して、左の歌が〔二十六に〕あ

る。

はる〴〵とすだの河原をあさゆけば霞めるほどや渡なるらん　正三位季經卿

夕霧にすだのわたりはみえねども船人よばふ聲きこゆなり　源兼經朝臣

又同書〔二十一〕に、

すみだ川昔はきかずいまこそは身を浮橋のあるよなりけれ　光俊朝臣

此歌は康元元年鹿島社に詣でけるに、すみだ川のわたりをみれば、かのわたり今はうきはしを渡したりければと云々。

浮橋とは船橋である。一遍聖人繪詞には石濱（イシハマ）の橋の圖がある、それは

板橋である。其の地は今の橋場の邊であらうと云ふ。

又同書〔三十一〕に、

せきやの里

いほさきのすみだ河原に日は暮れぬせきやの里にやどやからまし

光俊朝臣

此歌は家集に云、康元元年九月鹿島社に詣でけるに、すみだ河のわたりにて、此わたりのかみのかたに河のかたにつきて里のあるをたづぬれば、せきやの里と申、まへには海ふねもおほくとまりたりと云々。

關屋の里は、新編武藏風土記稿に、「按ニ今隅田川ノ對岸足立郡千住宿ノ内ニ關屋天神アリ、是關屋里ノ舊地ナリトイヘリ。」とある。

俊成卿五社百首

倘、個人の集に就いて檢するに、俊成卿文治六年五社百首に、旅、

角田川古郷思ふ夕ぐれに啼音をそふる都鳥かな

壬二集

藤原家隆の壬二集に、

旅の歌とて

渡守わたらぬさきに打隱せ隅田川原の鳥の名もうし

爲相卿千首

爲相卿千首に、

都には通はぬ鳥の隅田川名にしのびてもかひやなからむ

慶運法師集

慶運法師集に、城鳥

隅田川河霧ふかし都鳥ありやなしやとたどるばかりに

隆祐朝臣百番自歌合

隆祐朝臣百番自歌合に、

此世にはよしこととはじ角田川すみえぬかたの鳥の名もうし

棠雅千首

棠雅千首は、覊中河

行末の宿をばとはで隅田川すむなる鳥の名をしのびつゝ

かやうに隅田川と云ふと、殆ど全く都鳥を配して詠んでゐる。因みに

連歌

連歌に就いて思ひ出されるのは、宗祇法師が文明二年三月下旬の頃、隅田川原の近いあたりにしばし宿つて、連歌に志の深い人々と談話を交へて、吾妻問答を成した事である。又大永元年に成つた伊勢物語詞百韻といふ連歌には、「舟こぞりてもよぶわたし守」の句が見えてゐる。亦逸してはならぬ。

北國紀行

更に他の方面では、堯惠法印の北國紀行に、左の記事を認める。

廿三日〔文明十八年十二月〕には角田川のほとり、鳥越といへる海村に、善鏡といへる翁あり。彼宅に笠やどりして、閑林にあがめける金光寺に在宿し侍。二月〔文明十九年〕の初、鳥越の翁艤して、角田川に泛びぬ。

東岸は下總、西岸は武藏野に續けり。利根入間の二河落合へる所に、彼古き渡りあり。東の渚に幽村あり。西渚に弧村有。水面悠々として兩岸に等しく、晩霞曲江に流れ、歸帆野草をはしるかとおぼゆ。筑波蒼穹の東にあたり、富士碧落の西に有て、絕頂はだへにきえ、裾野に夕日を帶、朧月空にかゝり、扁雲行盡て、四域に山なし。

浪の上のむかしをとへばすみだ川霞やしろき鳥の涙に

六月の末、角田川のほとりにて、遠村夕立、

雲わくるひかげの末も夏草の入間の里や夕立の空

初秋の比、よふかき道をくるに入間の舟渡りまで見送る人あまた侍りしに、角田川の朝霧いづこをほとりともしらず。小舟の行違

ふかひの音のみ身にしみて、哀に覺え侍しかば、彼翁方へ申送り侍し。

おもかげぞ今も身にしむ角田川あはれなりつる袖の朝霧

舟中の眺望を記すに、駢儷の體を以ゐて、文藻流麗を極めてゐる。右に見える鳥越の名は、今淺草區内に遺つてゐる。利根、入間の二河の落合ふ所に古い渡があるといふ文意は、古の水脈を回想せしめるものである。

道興准后の廻國雜記には、淺草の里の石枕の傳說を叙べ、淺草寺に參詣する事を記し、さて「まつち山といふ所にて」とて歌がある。

いかでわれたのめもおかぬ東路のまつちの山にけふはきぬらむ

しぐれてもつひにもみぢぬまつち山落葉をときと木枯ぞ吹く

廻國雜記

又、「あさぢが原といへる所にて」とて、

人目さへかれてさびしき夕まぐれ淺茅が原の霜を分けつゝ

と詠じ、それから

斯て隅田川のほとりに到りて、皆々歌よみて、披講などして、古の塚のすがた哀れさ今の如くに覺えて、

古塚のかげ行水のすみだ川聞渡りてもぬるゝ袖かな

同行の中に竹筒（サヽエ）を携へける人ありて、盃酌の興を催し侍りき。猶行々て川上に到り侍りて、都鳥尋ね見むとて人々さそひける程に、まかりてよめる。

こと問はむ鳥だにみえよすみだ川都戀ひしと思ふゆふべに

思ふ人なき身なれども隅田川名もむつまじき都鳥哉

やう〳〵歸るさになり侍れば、夕の月所がらおもしろくて、船をさしとめて、

秋の水
すみだ
川原に
さすら
ひて船
こぞり
ても月
をみる



梅若塚（江戸雀）

かな

などとある。右に梅若塚の事を言つてゐるのは、洵に注意しなければならぬ。萬里集九の梅花無盡藏に、隅田川の事を言つた詩（文明十七年十月廿六日の作）があつて、「隅田春色浪如レ花。鳥若知レ都我細問。」と賦した註に、「都鳥隅田之故事也。河邊有二柳樹一。蓋吉田之子梅若丸墓處也。其母北白川人。」とあるのを見ると、梅若傳説は既に其の頗著名となつてゐたのである。

謠曲隅田川は實に此の故事に據り、伊勢物語を加味して成つたもので、勿論梅花無盡藏や廻國雜記以前の作であらう。此の曲の梗概は、梅若丸といふ童子が、人商人に誘拐せられ、都から奥州へ下る途中、隅田川の堤で煩つて失せた。母なる人、其の跡を慕つて物狂となり、

遙々こゝに尋ね來り、たま／＼其の一周忌に當る日、船中で事の由を聽き、悲しみ歎いて、跡を弔つたところが、梅若丸の亡靈が現れ出たといふのである。尚、全文を揭げて置かう。(子方　梅若丸幽靈、シテ　梅若丸の母、ワキ　渡守、ワキヅレ　旅人である。)

ワキ詞「これは武藏の國隅田川の渡守(ワタシモリ)にて候。今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存候。又此在所(ザイショ)にさる子細あつて、大念佛と申す事の候間、僧俗を嫌はず人數(ニンジュ)を集め候。其由皆々心得候へ

ワキヅレ次第「末も東の旅衣、／＼、日も遙々の心かな。詞かやうに候者は、都の者にて候。われ東に知る人の候程に、かの者を尋ねて唯今まかり下り候。道行雲霞、あと遠山に越えなして、／＼、幾關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、こゝぞ名に負ふ

隅田川、渡りに早く着きにけり。〳〵。詞急ぎ候程に、これははや隅田川の渡りにて候。又あれを見れば、舟が出で候。急ぎ乘らばやと存候。いかに船頭殿舟に乘らうずるにて候。ワキ「なか〳〵の事、召され候へ。まづ〳〵御出で候後の、けしからず物騒に候は、何事にて候ぞ。ワキヅレ「さん候、都より女物狂の下り候が、是非もなく面白う狂ひ候を見候よ。ワキ「さやうに候はゞ、暫らく舟を留めて、かの物狂を待たうずるにて候。

シテサシ一聲「げにや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行き人に言傳てゝ、行くへを何と尋ぬらん。聞くやいかに、上の空なる風だにも、地「松に音する習ひあり。シテ「眞葛が原の露の世に、地「身を恨みてや、明け暮れん。

シテ「これは都北白河に、年經て住める女なるが、思はざる外に一人子を、人商人(ヒトアキビト)に誘はれて、ゆくへを聞けば逢坂の、關の東の國遠き、あづまとかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり、思子(オモヒゴ)の、跡を尋ねて、迷ふなり。地下歌「千里(チサト)を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、上歌 もとよりも、契假なる一つ世の、〳〵、其中(ウチ)をだに添ひもせで、こゝやかしこに親と子の四鳥の別これなれや。尋ぬる心のはてやらん。武藏の國と下總の中にある隅田川にも着きにけり。〳〵。シテ詞「なう〳〵われをも舟に乘せて給はり候へ。ワキ「おことはいづ方よりいづ方へ下る人ぞ。シテ「これは都より人を尋ねて下る者にて候。ワキ「都の人といひ、狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此舟には、乘

せまじいぞとよ。シテ「うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ、舟に乘れとこそ承るべけれ。かたの如くも都の者を、舟に乘るなと承るは、隅田川の渡守とも、覺えぬ事な宣ひそよ。ワキ詞「げに〳〵都の人とて名にし負ひたるやさしさよ。シテ「なう其言葉はこなたも耳にとまるものを、かの業平も此渡りにて、名にし負はゞ、いざこと問はん都鳥、我が思ふ人は、ありやなしやと。詞なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申候ぞ。ワキ「あれこそ沖の鷗候よ。シテ「うたてやな浦にては千鳥ともいへ、鷗ともいへ。など此隅田川にて、白き鳥をば都鳥とは答へ給はぬ。ワキ「げに〳〵誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ「沖の鷗と夕浪の、

ワキ「昔にかへる業平も、シテ「ありやなしやと言問ひしも、ワキ「都の人を思妻、シテ「わらはも東に思子の、ゆくへをとふは同じ心の　ワキ「妻をしのび、シテ「子を尋ぬるも、ワキ「思は同じ、シテ「戀路なれば、地上歌「われも又、いざ言問はん都鳥、〳〵、我が思子は東路に、ありやなしやと、問へども〳〵答へぬは、うたて都鳥、鄙の鳥とや云ひてまし。げにや舟競（フナギホ）ふ堀江の川の水際（ミナギハ）に、來居つゝ鳴くは都鳥、それは難波江、これは又隅田川の東まで、思へば限なく、遠くも來ぬるものかな。さりとては渡守舟こぞりて狹（セバ）くとも、乘せさせ給へ渡守、さりとては乘せてたび給へ。ワキ詞「かゝるやさしき狂女こそ候はね。急いで舟に乘り給へ。此渡りは大事の渡りにて候。かまへて靜に召され候へ。ワキヅレ「なうあの向

ひの柳の下(モト)に、人の多く集りて候は、何事にて候ぞ。ワキ「さん候、あれは大念佛にて候。それにつきて哀なる物語の候。此舟の向ひへ着き候はん程に語つて聞かせ申さうずるにて候。語「さても去年三月十五日、しかも今日に相當りて候。人商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひ取つて奥へ下り候が、此幼き者、未だ習はぬ旅の疲にや、以ての外に違例し、今は一足も引かれずとて、此川岸にひれふし候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ。此幼き者をば其まゝ路次に捨てゝ、商人は奥へ下つて候。さる間、この邊の人々、此幼き者の姿を見候に、由ありげに見え候程に、さま〴〵に勞(イタハ)りて候へども、前世の事にても候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづく、いかなる人ぞ

と、父の名字をも、國をも、尋ねて候へば、われは都北白河に吉田の何某（ナニガシ）と申しゝ人の、唯ひとり子にて候が、父にはおくれ、母ばかりに添ひまゐらせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになりゆき候。都の人の足手影もなつかしう候へば、此道のほとりにつきこめて、しるしに柳を植ゑて給はれと、おとなしやかに申し、念佛四五返唱へ、つひに事終つて候。なんぼう哀なる物語にて候ぞ。見申せば、船中にも少々都の人も御座ありげに候。逆緣ながら念佛を御申し候ひて、御弔ひ候へ。よしなき長物語に、舟が着いて候。疾（ト）う〳〵御あがり候へ。ワキツレ「いかさま今日は此のところに逗留仕り候ひて、逆緣ながら念佛を申さうずるにて候。ワキ「いかにこれなる狂女、何とて舟よりは下（オ）りぬぞ、急いで

あがり候へ。あらあさましや、今の物語を聞き候ひて、落涙し候よ。なう急いで舟よりあがり候へ。シテ「なう舟人、今の物語は、いつの事にて候ぞ。ワキ「去年三月けふの事にて候。シテ「さて其兒(チゴ)の年は、ワキ「十二歳、シテ「主(ヌシ)の名は、ワキ「梅若丸、シテ「父の名字は、ワキ「吉田の何某、シテ「さて其後は親とても尋ねず、ワキ「親類とても尋ねこず、シテ「まして母とても尋ねぬよなう、ワキ「思ひもよらぬ事、シテ「なう親類とても親とても、尋ねぬこそことわりなれ。其幼き者こそ、此物狂が尋ぬる子にてはさむらへとよ。なうこれは夢かや、あら淺ましや候。ワキ詞「言語道斷の事にて候ものかな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや。あらいたはしや候。かの人の墓所(ムショ)を見せ申候べし。

此方へ御出で候へ。

シテ「今まではさりとも逢はんを賴みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今は此世になき跡の、しるしばかりを見る事よ。さてもむざんや死の緣とて、生所を去つて東のはての、道の邊の土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、此の下にこそあるらめや。地「さりとては人々此土を返して、今一度此世の姿を母に見せさせ給へや。上歌 殘りても、かひあるべきは空しくて、〳〵、あるはかひなき帚木の、見えつ隱れつ面影の、定なき世の習、人間うれひの花盛、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲覆へり。げに目の前の浮世かな、〳〵。ワキ詞「今は何と御歎き候ひても、かひなき事、たゞ念佛を御申候ひて、後世を御弔ひ候へ。既に月

出で川風も、はや更け過ぐる夜念佛の、時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らしすゝむれば、シテ「母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯ひれふして泣き居たり。ワキ詞「うたてやな餘(コ)の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者(マウジヤ)も喜び給ふべけれと、鉦鼓を母に參らすれば、シテ「我が子のためと聞けばげに、此身も鳧鐘を取上げて、ワキ「歎きをとゞめ聲澄むや、シテ「月の夜念佛諸共に、ワキ「心は西へと一すぢに、シテワキ二人「南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌陀佛。地「南無阿彌陀佛、〳〵、〳〵、シテ「隅田河原の波風も聲立て添へて、地「南無阿彌陀佛、〳〵〳〵。シテ「名にし負はゞ都鳥も音を添へて、子方、地「南無阿彌陀佛、〳〵〳〵。シテ詞「なう〳〵今の念佛のうちに、まさしく我が子の聲の

聞え候、此塚のうちにてありげに候よ。ワキ「われらもさやうに聞きて候、所詮此方の念佛をばとゞめて候べし、母御一人御申候へ。シテ「今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。子方「南無阿彌陀佛、〱と、地「聲のうちより、まぼろしに見えければ、シテ「あれは我が子か、子方「母にてましますかと、地「互に手に手を取り交はせば、又消え〱となり行けば、いよ〱おもひはます鏡、面影もまぼろしも、見えつ隱れつするほどに、東雲の空も、ほの〲と明け行けば、跡絶えて、我が子と見えしは塚の上の、草茫々として唯、しるしばかりの淺茅が原と、なるこそ哀なりけれ。〱〱。〔觀世流改訂謠本に據る〕

謠曲拾葉抄に曰く、

世傳、班女の謠に作る吉田少將、此墨田川に作る吉田の何某同人也。且又美濃國野上の宿の遊女花子も、此謠に作る狂女是も同じ人也。子二人あり、兄は梅若、弟を松若といふ。父の少將は身まかりぬ。弟松若は天狗にとらはれ、兄梅若は人商人にさそはれて路頭の土となる。母の心はいはん方なく哀れなる事共也。(中略)梅若塚在二河東岸下總之地一梅林山木母寺とて有、本尊は阿彌陀也。かの柳の木は枯て朽木殘れり。每年三月十五日此寺において大念佛あり。又河のこなた武州の地淺茅原總泉寺の前に母の塚あり、云二妙龜山一。此所に鏡の池と云所有、母梅若丸を尋來り、終に此池に身を投じて死すといへり、今は池もなし。

と。一體此の謠曲は何時頃作られたものであらうか。金春禪竹(世阿

彌宗丞の聟）の歌舞髓腦記には、既に其の名が見えてゐる。さうして謠曲通解には元雅（世阿彌の長男、長祿三年歿。）の作と註してゐるのである。此の曲が近世文學に影響した事の至大なのは、改めて後に述べよう。

東路の苞

偖又、宗長の東路の苞に、隅田川を通る事が見えてゐる。

隅田川の河舟にて、下總國葛西の庄の河内を半日計りよしあしをしのぐ折しも、霜枯は難波の浦に通ひて、隱れて住みし里々見えたり。鴛鴨都鳥堀江漕ぐ心地して、今井といふ津よりおりて云々。

葛西の入江といふのは、小名木川に當るとの説がある。それから谷宗牧の東國紀行（天文十三、四年）に、

東國紀行

角田川もみえわたるに、（中略）清閑多田こゝまで數日のおくりも

懇切なれば、(中略) 袖ぬれがほなる氣色なきにしもあらねば、涙もろなる心弱さをまぎらはさむとて、

角田川舟こぞりはの長刀にあひしらひてぞふりはなれつる

といひつゝ、みやこのかたのみおもひやられて、岸ちかきなるもおぼえず、渡守におどろかされておりたり云々。

「舟こぞりはの長刀」と、面白い掛詞を使つてゐる。北條氏康の武藏野の紀行に、

武藏野の紀行

大澤の庄などを行くに、漸々すみ田川にもつきぬ。河づらを見れば、誠に白き鳥の、嘴と足と赤き鳥のむれゐて、魚をくふありさま、昔を思ひいでゝ、

都鳥隅田がはらに舟はあれどたゞその人は名のみありはら

むかひは安房、上總のあたりに見渡さる。

木下長嘯子の道の記

河畔の蒼茫として曠濶であつたことを記してゐる。豐臣勝俊即ち木下長嘯子の「はじめてあづまにいきける道の記」には、

角田川ちかしときゝて見に行く。今も舟にのれといふは、この渡守のくせにやあらん。

これぞこの東路遠く思ひこし角田かはらの渡なりけり
とはでたゞそれと頼まぬ角田川むれゐる鳥はあらぬなもこそ

と見えてゐる。

賀茂眞淵の文

近世名家の作では、賀茂眞淵の「隅田川に船を泛て月をもてあそぶ序」が最も愛誦すべきものである。言詞が古雅で、いかにも情味が津々としてゐる。

いつはあれど、照る月の秋の盛、いづこはあれど、行く水のすみだ河に、夕波のふた國かけたる月見むとて、からやまとの文人（フヒト）、絲竹にしもたへたるをつらねて、泛ぶることあり。舟は汐のまに〳〵楫ならずして上り、岸は舟のまに〳〵居ながらにしてぞ移る。岸遙かに晴れて、百のうてなに簾を捲き、風靜かに吹きて、千々の舟の帷（カタビラ）を動かせり。あるは陸、あるは舟、或はたかき、或はいやしき、呉（クレ）の舞妓（マヒヒメ）、高麗（コマ）のわざをぎ、色は波に匂ひ、聲は空になん澄みにける。これやこの蘆荻を分けつる國にやあるらん。都鳥に言問ひける國にぞあるらし。時のゆければ、かゝる都にしもなりにけることを、あるは目に喜び、心に驚き、あるは醉なきしして今をほめ、歌しのびして古をなん語らひける。時に或人のいへらく、

我朝に隅田川てふ河こそ多けれ、打寄する駿河なる、大鳥の出羽なる、此武藏なるは、古の言の葉の集には、下つふさのあはひとかゝれ、後の道行ぶりの日記には、相模の境なりとぞ記しける。いでや月待つほどのなぐさめに、人々此事定め給はんなりといへば、あるが中に一人論ふ言は、夫古の集は後の人の筆を加へたるあり、後の日記は野らに向ひてしるす事あれば、據るべきものゝなづむべからざるをや。抑〻蘆荻をや分けつらん。都鳥にや言問ひけん。蘆荻は人草繁からんさがにして、鳥の名は都とならんしるしにぞありけらし。しかあればかゝる都の內に流るゝ河をしも、絕えせぬ御代のためしにも引き、ふりにし名所のよすがにもいふべきなりけり。とことゝ終れば、待取りて物の音をわなゝかし、澄上る月に

嘯き出たる、いづれの所かはしかむ。いつの時にかは忘れまし。則ち舟擧りてかしこければ、今宵の有様のべつくすべし。唯我獨醉ふ。かゝれば何の心をかいはん。

わたつうみの夕汐のぼるすみだ川つきのそらまでふねも行かなん

片玉集の女流の文

それから片玉集（此は津村淙庵の編んだ和文の集であつて、其の抄本は太田南畝の三十幅に收めてある。）を手にすると、中に春光和煦の日に於ける河畔の遊樂を記した閨秀の文二編を認める。其の雅懷、其の才筆、女流文學として逸し難いと思はれるから、長篇ではあるが、そのまゝ示して置かう。

みどりをひろふ言葉　　秀〔瀧恆孝妻〕

東叡の山陰、根岸の里に庵しめて侍りしは、いかなる宿世深き契にや、はたかの里に何がしのぬしいませしに、その妻なるはらからともひとしきまじらひなし侍るも、げに淺からぬ宿世なりかし。春霞立そふ比より、わくらはのいとま□□□青柳の蔭ふむ路よりはじめて、こゝかしこの花の陰にいざなひつゝ、猶もろともにみどりひろひ侍らばやなどかねごとして打過るほど、はや彌生も末つかたなりぬ。やゝとぢむる春の名殘しもいとゞしたはるゝに、はたこぞの春、ある人のすみだ川の富士をうつしゑにせしを見侍りしが、さもよくに侍るにと物語りしもゆかしくて、けふしもかのわたりとはゞやとて、つとめて諸共に立出でぬ。駒形よりさゝやかなる舟して漕出けるに、やう〳〵風吹出で波たち侍れば、人

々うしろめたしなどつぶやき侍るも、いと心ぐるし。かくてまさきなる岸にのぼりて、先稲荷の社こそとて詣で侍りしに、かたへのやすらひ所へのぼりて、しばしばかりかたらふ。むかひはすみだ川のながれに、秋葉、三圍とかや、さて見渡すけしき、またなきおかしさいはんかたなくて、

霞しく行方はそことわかぐさや木のめもはるの野べぞえならぬ日もたけゆけば、舟にてすみだ川の渡りこえ侍りて、夫より聞傳へし梅若山王とかやの社へ詣で侍りしに、何くれとあはれさ限なし。

名にしおふすみだがはらの春にきて昔語を誰にとはまし

誰もさぞおなじこゝろにしのぶらん名のみ殘れる青柳のかげ

ちかきわたりの鏡の池とかや、人のをしへしかば、まうで侍りて、くもりなき名のみのこしてすみだ川かゞみが池は水草ゐにけりあはれさ諸共に思ひつゞけつゝ、又つゝみづたひにこゝかしこさまよふに、いとけなきわらはべをうなごなど袖引つれてみどりひろふさま、よそながら心ものどめあへで、いざ酒くまんとて、堤に休らひつゝみわたすさま、

すみがきにうつさまほしく野も山もひとつ綠に霞むはるけさなど思ひ續け侍るも、はや夕日のかたぶくに、霞のたえまより、名高きふじのね見えければ、

夕づく日かゞやきそひてすみ田川こゝにもふじの近く見えけりげに〳〵たぐひなき詠ぞかし。彼物がたりしふですさみまで、い

みじう思ひ合さるゝに、みる／＼霞こめつゝ、暮ふかく成ゆけば、いざかへりなんと思ふも、なごりさへわりなくて、いかゞせんと詠わぶるかたはらに、いと心ありげなる刀自、山の山吹一えだをりて家づとにとて見せ侍るを、

手折りてし心ふかさは山吹の花のいろにも見えてゆかしき

など戯れごといひて打過ぐるに、遠近かけてめもはるかなる賤が垣根にいと白う見えしこそ又なきおかしさなれ。

心ある賤や住むらん山ざくらほのかに匂ふはなにかこひて

いと名殘惜しくて過行ほど、暮ふかくゆきかふ人も見えわかねば、秋葉、三圍なる御社にも詣でず侍るこそいと本意なけれ。はたちかき日してまかで侍らんなどかねごとしつゝ、彼の岸より棹さゝ

せて歸りなんとて、しばしがほど四方のけしき詠めしも、くれはてぬ水の面は、行きかふ舟もさだかならず、春のひねもすあくがれし名殘のみやるかたなく、駒形なる岸につきぬ。夫よりたゞけふの名殘のみしたはれつゝ、このまゝ怠りがちに過さば本意なし、ありがたくと〔くとはき歟〕いとま待ちえて、今一たびとひゆかんと舟長に契るも、せめてわりなき身のこゝろにまかせぬくりごとなるべし。なほ夢にだにさだかならず、あかぬおかしきなごりのみ、諸共にしたひ侍りしぞいと〳〵口惜しきや。

都鳥　　さよ〔佐藤德明妻〕

としさりとしくれど、花のかげのみおぼつかなく、野邊の小草の色も見ず、くれゆく春は惜しめども。いたづらにのみ打過るを、

ことしばかりはと思ひおこして、親しうなれむつぶ秀子のおもとと、ひと日もろ共に出立侍りぬ。淺草川より小舟に打乘りて、いづこをさしてゆくともなく漕出づるまゝに、川つらのけしきそこはかとなく霞みわたり、水のおもてうら〳〵と、いはんかたなくのどやかにみゆ。名ある寺社などひだり右に見て、打過侍るに、風もやう〳〵吹きそひゆけばにや、程もなく眞崎とかやの岸につきて、近きやどりに休らひつ詠むれば、ゆきかふ人のさまかたちもことにおかし。いたうゑひすぐいたるにや、をのこをうなみだれありく。川よりをちは野べのけしきも靑み渡り咲くまゝ、淺茅の花も色香は分かねど、ほのかにみゆるはいとおかし。すみだ川のわたり、木深き森のたゝずまひも、霞のなかにこぐらうみゆ。い

とゞありやなしやとたどられて、人々日たけぬと急げば、心あわたゞしく、はた舟えてむかひの岸にいたる。へだてしよりも目に近きは見所おほく、かのわかざりしは菫小草などの花の咲滿ちたる也。堤のあなたはいづことしらねど、田面はてしなう打續き、しづが苗代水せきて、こゝかしこにいとなむあぜの通路あやしうほそう、ようせずば落ちぬべき道の所々引續きて、遠く見渡さるゝに、いつしか霞はよそに立つゞきて、はるかなるけしきえもいはず。

打續く野田も澤田も眺めやるはては霞にたゆるはるけさ

かくみるごとに心とまりて、この堤をこゝかしこあくがれありくに、花は皆散過ぎて口惜しき陰ながら、青葉の木末ににほひのと

まれるもあかずをかしうみゆ。しづが垣根のまばらに、八重山吹などの手折すさびしく〔しくは て歟〕はかなう殘れるも、所につけておかしとばかりやすらひて見るまゝに、げに昔の人もいみじうめでおきけんかはづらのさまにも、先いにしへのみしのばれて、

都鳥こゝにいくせをすみだ川今も昔を人や言問ふ

隅田川こゝにいくせをふる里の春をもよそにみやこ鳥かな

また遥につたひて打見かへれば、分けぬる道の跡もなく、いづくも同じ田面にみわたさるれば、

とひわびぬ川添ひ小田もひとつにて我がこし路はありやなしや

と

など口すさびつゝ、まづ梅若の御社にまうでんとて、人々も急ぎ

つきぬ。かどさしいるより、いとはあれに心しめり、こと所に似ず物わびしう、打見るにまづ涙ぐまる。

つたへ聞く古き昔のあはれさもたゞ目のまへの涙なりけり

かのしるしの柳も朽ちはてゝ、切捨てし木の枝のやうにて、いさゝかのこれり、

殘しおく古枝の柳くちはてゝしのぶ昔やうとく成なん

立並ぶ一本に、はるのみどりのこゝちよげにうら〳〵と風に打靡きて、古忘れがほなるもあはれに、

しるしとて殘るもひさし綠そふよゝにふりせぬ靑柳の影

かの御社のさまげにはたあはれに、近きわたりのをのこにや、多く集りてかねうちならし行ふねぶつの聲、いとあらゝかにきこゆ

ゐもあはれ也。こゝにもしばしとて打休らふまゝ、たゞ此川岸によする波の音もあやしう、昔のみしのばしく、
古き名を世々につたへてすみだ川よりくる波も名にや立つらん
人々かへさにおもむくべしなど、さゝやきあへるを、かゝる折からは、鏡が池のあはれを知らまほしなど、此のおもともいふにぞそゝのかし伴なふ。はたこゝもとなる池のさま也。
うつる世の今も鏡が池の名に人の立寄るかげは殘れり
うつり行く世の末までも影殘す鏡がいけとみるもこひしきあはれ盡きせず、いざさらばとて、又かの堤をつたひきて、わらふだしきて、酒などくむほど、散りにし花の木陰にも、千代經ぬべき心地して、さらにかへらんことも思はず、めづらしきところ〴〵

思ひ出しつゝ物語して、あはれ都の春をも諸共に、いつしか宇治小野のわたりのあはれをも、音にのみ聞く物かはなど戯れごちて、やう〳〵日もかたぶきがたに成行けば、河水のひかりもいとゞ夕日かげにてりあひたり。霞の絶間にふじのねの高やかにうかび出でたるも、めなれぬことゝもに興ありて、いとゞあかず。

ふじのねの霞の衣ひきかへてすみだ川原に見るも珍し

河風に流す霞はふじのねの煙をそひ〔ひは／へ歟〕てたつかとぞみる

はや暮れぬべし、かへりなんとまめやかに打驚かすにぞわりなくて立ちぬ　かの三圍の岸に舟待する程なれば、かしこまでとて且見かへりがちなるも、道すがらあかずのみ思ひつゞけらるれば、春をすぐさで又もとはましとひそかに契る。

此比の花にそめてし心をも野べの緣にいとゞ色そふなどひとりごちて、暮れぬべきけしきなれば、三圍の御社にも詣でず、又こそと堤よりぬかづきて斷り申す。罪うべきわざなり。ふなをさもいたう待ちわびてや、うちふしぬるを驚かして、漕出るほどくれはてたり。やよひ二十日あまりなれば、くらきよのさまに霞さへ立渡りて、人々もやうく〳〵ゑひもてゆくに、いとゞ物を見えわかず、たどひねもすのおかしさのみ盡きせぬことに思へり。かくあくがれなば、おのがとりぐ〳〵に、山蔭のやどり物うくや成果てんなど、戲れて打笑ひぬ。

安藤朴翁の紀行
北村季文の記

それから安藤朴翁が、元祿十年常陸に下つた紀行の常陸帶に、隅田川での詠がある。又北村季文（季吟の裔）の隅田川遊覽記は天保十四

年九月二日、傳奏の兩卿德大寺實堅、日野資愛に相伴して、墨田川に川逍遥した記である。共に今は略して置く。

江戸の歌人

戸田茂睡

翻つて江戸の歌人の吟哦を一誦しよう。戸田茂睡撰の鳥之迹に、

眞土山　　梨本茂睡

たのめつゝまつちの山に入はこず我が庵崎に又ひとりねん

賀茂眞淵の納涼會

清水濱臣編の近葉菅根集に、賀茂眞淵の縣居(アガタヰ)の高殿で納涼した折の眞淵をはじめとして門弟だちの長歌を多く出してゐる。隅田河畔の清風に夏を忘れた雅會が想ひやられるのである。左に二篇を載せよう。

信　益

石(イソ)の上(カミ)、古き時より、限なき、例にいへる、武藏野の、野べもせし
とや、しなが鳥、安房に向へる、浦波に、かけてつくれる、鳥が

なく、あづまの都、かく見れば、不二の高根の、白雪の、いつともわかず、とに見れば、筑波の山の、いやしげき、御代のみかげを、八百萬、あふぎてつどふ、民草の、おのがじしさへ、葛飾の、昔のまゝの、繼橋の、つぎて久しく、變らじな、かゝる時にし、角田川、かはべによする、漣の、音もさやけく、ふく風の、凉しきゆふべ、天雲の、高き臺に、思ふどち、携さひのぼり、おもはしき、方も見はらし、くるほしき、ことをも更に、忘れつゝ、樂しき時に、逢ひにけるかも。

風わたる松よりをちの浦波も此のおばしまによるとこそ見れ

源　秀　信

久方の、日かげかしこき、六月(ミナヅキ)の、たへぬ暑さに、大方の、人の

やどりは、かはほりの、扇の外の、風もなし、しかはあれども、高き屋に、上りて見れば、角田川、大河のべも、せきまでに、ゆきかふ千々の、大船の、ゆたけき御代に、すむ民の、おのがさまぐ、涼みとり、心をやると、みやびたる、物の音まじり、わざをぎの、ゑらぎもしどに、賤しきも、よきもいとはず、うちはへて、遊ぶも見つゝ、夏の日の、光忘れて、浮雲の、くるゝもしらぬ、今日にやはあらぬ。

あはと見るあはの浦風遠けれど袂涼しく通ひ來にけり

加藤千蔭

加藤千蔭のうけらが花には、隅田川の歌が頗る多い。

霞中春雨

墨田川簑きてくだす筏師にかすむあしたの雨をこそしれ

此の一首は名吟として、最も人口に膾炙してゐる。

墨田河の花見にまかりけるに盛なりければ

春はたゞ都鳥にもみをかへて散るとも花のなみにかづかむ

こゝは荒川の下つ瀬なれば

吹く風の荒河の瀬に雪とちり波とよせくる山櫻かな

孝標の女のあすだ川といひけんも此川なり

東路のあすだ川べのさくら花あすさへ訪はん散りな亂れそ

郭公

すみだ河堤に立ちて舟まてばみなかみ遠くなくほとゝぎす

是も亦景情雙絕と稱へてよい歌である。

夏の夕角田河へ舟をうかべて

わたつみの沖より通ふ夕風に墨田河原の眞菰なみよる

冬眺望

角田河きしのむらあし枯れふして甲斐が嶺遠き雪をみるかな

近葉菅根集に載せてある同じ人の左の長歌も、朗々誦すべきものである。

む月五日の夜雪ふりけるがつとめては渡りければ春海、雄風などいざなひて舟にて石濱の庵へゆきてよめる

東雲の、あけゆくあした、我宿の、垣ほの小笹、白雪の、つもるが上に、朝日かげ、にほへる見れば、角田川、きしのみ雪や、いかならむと、思ふ心に、さそはれて、小舟を浮べ、葛飾と、豐島のかたを、はるゞゝと、ひだりみぎりに、見さけつゝ、みをさかの

ぼり、みなぎはの、いほりに近く、舟はてゝ、かへりみすれば、遠近の、梢の雪は、泊瀬女（ハツセメ）が、ゆふ花なして、うみをなす、長き堤は、白妙の、麻手作を、千五百むら、さらせる如く、上つ瀬の、綾瀬の水を、さし下す、筏の床に、むら〳〵に、消殘る雪は、散る花の、面影見せつ、春深く、匂ふ櫻と、秋の夜の、さやけき月の、さかりをも、唯一時に、つどへつゝ、見るこゝちする、今日にやはあらぬ。

散る花か月の光か角田川きしのかれふにふれる白雪

小野古道家集に、

　はじめの夏

大舟に小舟ひきそへ隅田川いでゝ遊ばむ夏は來にけり

村田春郷家集に、

月のあかゝりける夜角太河にて

諸人の船ぎほひするすみだ川月のいるまで遊びてゆかむ　村田春郷

村田春海の琴後集に、

千蔭の石濱のやどりにて歌よみける時花錦を

角田川つゝみの花のから錦春はきてみぬ人やなからむ　村田春海

又次のやうな長歌も詠んでゐる。

正月の六日ばかりよべの雪の名殘見むとて角田川に舟を浮べてみをのぼる、隅田河原の、川舟の、ゆく方遠き、上つ瀬の、堤を見れば、白雪に、猶埋もれて、下草の、綠もわかず、立並ぶ、木々の梢は、春の日を、早く待ちえて、うら〳〵と、けぶりそめた

り、下つ瀬を、かへり見すれば、氷ゐし、芦邊の洲島、波の上に、友よびかはし、遠方や、霞のまより、夕虹の、たつかとばかり、久方の、雲井に高く、かゝる長橋。

かへし歌

きえせずばあすもとひこむ角田川かは遠白くふれる沫雪

松平定信の三草集に、

角田川の月を

言問はむ鳥のねぶりも靜にて月にこたふる秋の川波　松平定信

角田川の都鳥

角田川今はまことの都鳥昔のひなの事や問はまし

此の一首も言廻しに面白みがある。

後の人のでは、横山由清の月舍集に、

名所霞

花をこそわけて來つるを角田川かへりみすれば霞なりけり　横山由清

三條實美の梨のかた枝にも、隅田川の詠が多い。其の内から數首を拔くと。

花見に物しける折々よみし歌ども

月雪もたぐひなけれどすみだ川花ゆゑにこそ名は流れけれ

すみだ川月と花との盛にはゆきて遊ばぬ年なかりけり

對鷗莊にて

いそがしきつとめの隙をぬすみ來て橋場の里の月を見るかな

角田川の雪見にまかりて　三條實美

角田川しづけき雪のけしきこそ花にまさりて見えわたりけれ

對鷗莊で忘中閑を得てくつろがれた故公の雅懷は、今にゆかしい。

黑川眞賴の墨水餘滴に、

河邊霞

角田川ひきしほはやき浪の上に流れてみゆるうす霞かな

船中夏月

水上にふね漕ぎゆけば墨田川いよ〳〵月はすゞしかりけり

千鳥

宵のまはきこえざりしを角田川夜のふけゆけば千鳥なくなり

次に狂歌には左の如きものがある。後撰夷曲集に、

角田川にて　　信　輔　公

きてみればば武藏國の江戸よりは北と東の角田川かな

德和歌萬載集に、

隅田川　紀定麿

一ぱいに硯の海をひき出してすりながしたる墨田川哉

石川雅望（宿屋飯盛）の六樹園家集に、

隅田川の花を

隅田川さけは武藏と下總の中にいと大きなるかはあり

朱樂菅江の朱樂館家集に、

隅田川

名に負はぬ東のはての都鳥白きは雪とすみだ川かな

狂歌江戸砂子集（千首樓堅丸の文化八年の序文がある。）に、隅田川、

墨田川いざこと問はん渡守業平橋はほど近きやと　　松雨堂小夜風

ことわりや酒の名に呼ぶ隅田川鳥さへ嘴と足の赤きは　　木立斧丸

此は雅言俗語翌檜(アスナラウ)(越谷吾山撰)に、隅田川酒江戸羽衣酒とあるのを思ひ合せるものである。狂歌江戸砂子集續編に、同題、

都鳥みかはす隅田の渡守手足も赤くみゆる雪の日　　濱人

しら魚の篝はきえて角田川夜明にしるき花の横雲　　折安

以上の狂歌は、伊勢物語の故事などに基づいて詠んだもので、又掛詞

を使用したにしても品が惡くない。

更に俳諧の方面では、蓼太全集（俳諧文庫の內）收むる所の墨水兩岸行を以て、最も興味のあるものとしなければならぬ。其の序文は月巢の手に成つて、情趣の掬すべきものがある。

兩岸行　　滋雨亭月巢記

天明かなるはじめの年、はじめの秋七日といふに、大川の邊に逍遙す。そのさま苫屋形二艘をうかべて兩岸にわかつ。東には雪中居士文母をはじめとし、西には嵐亭宜麥を先として、勝友旁臻る。おの〳〵そこの佳景を探りて、行く水の深き淺き心の趣を水莖に染めむとならし。さて秋七種のいろ〳〵を竿頭に飾りてふたつの船のしるしとす。そも何の料ぞや。こゝは千舟百舟の行きかふ中

俳諧

墨水兩岸行

なれば、後れて來らむ人のたよりにぞ敬信〔敬は經歟〕のあその昔も思ひ出でん心にくし。そよや川風に薫り合うて、まねけるあり、くねるあり、七夕つめもうしろねたくやはあらぬ。又はにしに篳篥、ひがしに笙を吹きすさみて、互の舟の遲速をおとづる。其聲亮々として鳳鳴鸞嘯唐めいたるよそひともいへばさらなりや。まづ佃島なる住よしの御神にぬかづき、川づらにそうて漕出でたり。このわたりは常にめなれし所なれど、秋のはつ空袂すゞしう、浪のみどりもてはやされて、富嶽千秋の雪に漱ぎ、筑峯萬丈の霞を汲む。雲霧のすがた時の間に消えてまたなびくなど、えもいはぬ氣色ぞかさゝぎのよりはの橋も作るべきなど見るうちに、はら〳〵と音するにぞうたて興さめぬる心地ながら、洒涙〔編者云、「荊楚歳時記に「七

月六日雨曰二洗車雨一七日雨曰二洒涙雨一。」とかいへるけふの名にしおへば、一しほ秋のあはれはそふめり。よしなくそこに漕寄せよと、あまのおし手もいとたゆく、吐江が別莊深潮樓にしばらく晴をまつ。とかくするうちに雨も名殘なく、うき雲の行方もみどり立ちて、雨奇晴好すべてよろしと、各〻うちさんじつゝ、もとの渚におり立ちて、かなたこなたに纜を解きぬ。四方の空ことにゆるやかにして、心を天地の外に遊ばしめ、筆を墨水の流に競ふ、藻志錯發し、體裁增奇なり。風調ことごとく元祿の源に洄る。予がごときは才蚯蚓にひとしく、力畚にはづかしめらるといへども、この時にあへるよろこぼしき涙の露、せめては瑕なき玉の光をもあらそはまほし。在中將のいにしへ、貞室の昔もかゝる遊はありやなしやと、そこの都

鳥にとひてむかし。今朝よりもなほこの夕ばえのにほひくはゝれるに、いと〳〵倦まず行き行くに、ふとつき出でたる入相の鐘いとはしたなし。なほしも興盡きず、浪の綾瀨のあやまたず、木母寺のこなたにふたつの船を寄す。しらず夜とともに久かたの天の川原に棹さして、かの織女に宿からんとするにや。

墨水兩岸行

永代橋

秋ふるや住吉の岸の橋杜　蓼太

東岸、芭蕉池

啼替て猶古池やきり〴〵す　烏杜

西岸、三叉江

ながれ出る缺盃や秋の水　嵐亭

停馬石

君が代や駒もとゞめず石の露　逸賀

楊柳橋

塗下駄の少年行や橋の月　石意

椎樹館

月見えてうれしの森の木間哉　古音

首尾松

秋汐や葉裏をあらふいさり松　彭壽

白馬津

秋の水馬の白泡ながれけり　龍舍

駒蹄口

駒形や絹一練の川の秋　夫水

三圍祉

此宮居田面ながらの初穂哉　宇平

花容渡

乗合や提て千草の花筐　宜麥

弘福寺

秋の蚊や鐵の牛もくらぶべし　七樓

淺草寺

もろ人の海潮音や秋の風　方壺

款冬瀬

魚踊る葛西太郎や盆の月　故流

金龍山

夕照や頬に月をまつち山　梅素

五百崎

賣居の誰庵崎ぞ秋の昏　蓼太

黄茅原

取とめる戀どはなしに花野哉　月巣

秋葉山

稻妻や三尺房の納太刀　班象

明鏡池

赤そふや磨れいづる秋の月　一兆

望雪塚

澄よ月その世の雪をいざさらば　沙羅

總泉寺　實盛古墓

鬢髭の墨田河原や水の月　子興

白鬚宮

神まして波しら髭の秋すゞし　文母

花川戸

秋ふるき奈良屋大和屋花川戸　白羽

梅兒塚

木母寺に客の借着や水の月　吐江

花鯨淵

うつもるゝ鐘に聲あり秋の水　百溪
　關屋里
はつ雁や源氏の卷も此あたり　あや足
　伊萬戸
潮汐やこゝもくむかと死竈　三鵨
　七星橋
七株の萩大名や橋の跡　月守
　神樹林
田樂の五十串飛や秋の風　完來

誦し來ると、横卷を展觀するが如く、兩岸の名勝は彷彿として眼前に浮び出るのである。此う云ふ事は、當時市井の人が興味を感じた所の

やうで、彼の鶴岡蘆水の筆で隅田川兩岸一覽の板行を見たのも、此の天明元年である由を、武江年表に出してゐる。

俳文狂文

其の他、横井也有の鶉衣には隅田川涼賦がある。又、太田南畝の「よものあか」(文化五年)には向島賦があるし、四方の留粕(文政二年)には角田川に三船を浮ぶる記がある。此等は俳文若しくは狂文で、其の輕妙な點は喜ぶべきものがあるけれども、言詞の猥雜なことを免れない所もある。それで今全文を載せることは略して置く。

俗曲小説

尙、俗曲及び小說等の方面を一瞥すると、古淨瑠璃に隅田川(山本土佐掾正本)があり、近松巢林子に雙生(フタゴ)隅田川がある。謠曲に據つたのである。古今節唱歌の隅田川も亦梅若の事を謠つたのである。それから河東節の隅田川もやはり謠曲に基づいたものである。長唄にも隅

田川がある。（近世邦樂年表、寶曆六年三月の條に、兩洲(リヤウゴク)隅田川名所盡と出てゐる）其の賤機帶(シツハタオビ)も亦梅若の事を作つたもので、中に謠曲櫻川の趣致をも加味してゐる。其舞踊は、現今能く舞臺にも上る。近世邦樂年表を參照すると、文政二年六月の條に、八重霞賤機帶と題名を出して、作曲者には杵屋三郎助の名が見える。同書の編者は註して、山王の祭禮の出し物である由を言つてゐるが、それは本文の終の方の文句に合致するから、眞にさうと思はれる。偖演劇と云へば、劇方面の隅田川は、其の行はれた事はかなり古い。高野辰之、黑木勘藏兩氏の編纂に成る元祿歌舞伎傑作集には、出世隅田川、傾城隅田川、早送隅田川の三種が入れてあるのを見ても分る。同書編者の考說に、次のやうにある。

謠曲の隅田川や、お伽草子類の隅田河物語などの如く、梅若丸を題材とした歌舞伎劇は、江戸の劇場に於ては隨分繰返されたもので、其の種類も恐らくは曾我狂言に次いで多いであらう。この傑作集に收めたのは其の三種だけであるが、これ以外に編者の見た繪入狂言本だけでも、紅梅隅田川、愛兄隅田川、藪入隅田川等がある。さうして年代記を閲すると、享保年間だけで、少くとも十種の隅田川物が興行されて居る。之によつても當代流行の一斑を知る事が出來るであらう。

又やはり長唄の吾妻八景（近世邦樂年表、文政十二年四月の條に出てゐる。）には隅田川の事を包含してゐる。それから端唄の「夕暮の」「君は今」に至つては、頗る人口に膾炙してゐる所であるから、詞句を示

すまでもなからう。曲亭馬琴の小說隅田川梅柳新書は梅若傳說を以て脚色してゐる。かういふ類は尙尠くない。

賤機帶

名にし吾妻の角田川、その武藏野と下總の、ながめへだてぬ春の色、櫻にうかぶ、富士の雪、柳に沈む筑波山、紫匂ふ八重霞、錦をこゝに都鳥、古跡のわたりなるらん。春もくる空も霞の瀧の絲、亂れて名をや流すらん。笹の小笹の、風いとひ、花とめでたるうなる子が、ひとあきびとにさそはれて、行方いづくと白ゆふの、神に祈の、道たづね、浮きて漂ふ岸根の舟の、こがれ〳〵て、いざ言問はん。わが思ひ子の、ありやなしやと狂亂の、正體なきこそあやなけれ。船人是を見るよりも、ヨイ慰と戲の、氣ちがひよ〳〵

と、手を打ち叩き、はやすにぞ、狂女は聞いて振返り、アヽ氣遣とは、曲もなや、物に狂ふは我ばかりかは、鐘に櫻の物狂、嵐に波の物狂、菜種に蝶の、物狂、三つの模様をぬひにして、いとし我子に着せばやな子を、綾瀬川なにも似ず、心關屋の里ばなれ、縁の橋場の土手傳ひ、往きつ戻りつ爰彼處、尋ぬる我子はいづくぞや、敎へてたべと夕汐に、船長(フナヲサ)猶も拍子にかゝり、それ其の持つたるすくひ網に、面白う花を漉(スク)ひなば、戀ひしと思ふ其の人の、ありかを敎へ參らせん。何面白う花を漉へとか、いで／＼花を漉はん。あら心なの川風やな、人の思も白波に、散浮く花を漉ひ集めん、心してふけ、川風、沖の、鷗のちりやちり／＼むら／＼／＼はつと亂るゝ、黑髮も、とりあげて結ふ人もなし。船長今は氣の

嬉さ、何がなしほにと立上り、そもさてもわごりよは、誰人の子なれば、何程の子なれば、尋ねさまよふ其の姿、みる目もうしといさむれば、音頭〱と戯の、鼓の調引締めて、鞨鼓を打つて見せうよ。面白の春の氣色や、筆にもいかで盡さん、霞のまには樺櫻、雲と見えしは三吉野の、よし野の川の瀧つ瀬や、風に亂るゝ絲櫻、いとし可愛の兒櫻（チゴ）、したひ重ねし八重櫻、一重櫻の花の宴、いとしらし。千さとも薫る梅若や、恵を仰ぐ神風は、けふぞ日よしの祭御神樂（ミカグラ）、君が代を、久しかれとぞいはふ氏人。〔長唄大全に據る。〕

三　餘言

萬里集九が東遊して太田道灌に會ふと、道灌は一日福(即ち巨福山建長寺)鹿(即ち瑞鹿山圓覺寺)兩山の禪侶を招き、畫舫數隻を墨水に泛べて、詩歌鼓吹、一時の壯觀を極めたと云ふ。其の事は梅花無盡藏の江上春望の詩にあつて、其の風流が今更のやうに想察せられる。戰塵の歛らなかつた日に於て尙さうであつた。偃武の後となつて、東都の人士が益〻泰平に馴れるといふと、隅田河畔は花晨月夕遊覽の巷となつたのである。一度、江戸土產圖會(西村重長畫、次編は鈴木春信畫)や繪本江戸土產(一立齋廣重畫)や江戸名所圖會の類を披くと、其の狀が歷々としてゐる。山岡浚明の紫のゆかりに、永代橋邊の帆檣林立の景、兩國橋畔の殷賑雜

遷の狀を記したのを見ても、當時を回想することが出來る。又、八景と稱して、隅田川秋月、關屋落雁、潮入夕照、橋場夜雨、待乳晴嵐、駒形歸帆、洲崎晩鐘、富士暮雪といふ風に近江八景に擬した撰の有るやうになつたのも尤なことである。彼の葛飾北齋の妙手に成つた繪本隅田川兩岸一覽の如き、其畫樣は能く當時の風俗を傳へたものと言つて然るべく、洵に時勢が産み出した結果に外ならないのである。

第三篇　多摩川

一　多摩川の水系及び名稱

江戸名所圖會に多摩川の事を記して、

水源は甲州丹波山（タバヤマ）に發し、當國多摩川に入ては日原川も會流す。御嶽山の麓を經て、青梅の南に傍（ソヒ）、羽村（ハムラ）及び福生（フッサ）、拜島（ハイシマ）等の地に至る。又此地にて秋川の流も落合ひ、又石田と云に至り淺井川も合し、和泉村、中島村等の地より末は多麻、荏原、橘樹三郡の間を東流し、海に會せり。

とある。大日本地名辭書には水源を委しく記して、

西多摩郡雲取山の奥、雁坂（カリサカ）峠の東南に發し、市之瀬川といひ、柳

澤川、黑川等を合し、丹波川の名あり。
としてある。而して其の下流を六郷川と稱することは、亦世人の知る所である。又類聚三代格承和二年官符に見える石瀨(イハセ)川は、此の川の古名であるとは、故吉田東伍氏の說である。

此の川の武藏野開墾に關係の有る事は、吾妻鏡に見える所であつて、前に示した通である。さうして此の流を要害の地として、關戶に關を置かれた由來も亦前に出した。今の府中町分梅(ブバイ)附近は、元多摩の河原であつて、往昔通路の要衝に當り、所謂分陪(ブンバイ)河原と云つて、古戰場である。太平記卷十に見える合戰の外に、後にも數度の戰があつた。

分陪河原

それから又上水の事は、武江年表や瀨田問答等の諸書に見える所である。

上水

武江年表には承應二年の條に此うある。



武藏小金井（廣重筆）

今年玉川の上水を都下に通じて、衆庶の用に充てしめ給ふ。△玉川上水は(中略)承應元年の春、玉川庄右衞門並淸右衞門といへる者承りて、羽村より江戸までの水道を考へ、同十一月上水道掘割の儀を命ぜられければ、翌巳年初夏より仲冬に至り、羽村より四谷大木戸迄掘渡し、虎御門まで玉川の水を掛られしとぞ。其後諸方武家方市中に分水して日用とす。

今の東京市の水道に就いては、世人の熟知してゐる所であるから、こゝに贅しない。小金井の櫻は春毎に妍を競つて、此の水に影を蘸し、永く名勝となつてゐる。

川名

川の名は蓋し水源地の丹波山(タバヤマ)村に取つたのであらう。丹波(タバ)の意義は如何と云ふに、詳ではないけれども、古語はタニハでもあらうか。或

は思ふにタヲ（峠のこと）の類語であるかも知れない。タバ、タワ、タヲの關係が考へられる。尙、丹波といふ地名は、今の西多摩郡にも、古里村の大字に大丹波、小丹波が存する。川名の方が元で、それから郡名に及んだのであらう。

タマの漢字

今タマと發音して多摩と書くが、古くは多麻、多磨などとも書かれてゐる。萬葉集には、多麻河泊（タマガワ）、多摩乃余許夜麻（タマノヨコヤマ）などの例があり、日本靈異記には、古志火麻呂者。武藏國多麻郡鴨里人也。又、大伴赤麻呂者。武藏國多摩郡大領也。などともある。延喜式（民部上）には多麻とある。さうして和名類聚抄には、多磨と書いて、而も太婆（タバ）と訓してゐる。マはバと通音であるから、往古通はせて用ゐたものである。日本書紀

多氷の屯倉

を見るに、安閑天皇元年の條に、多氷の屯倉（ミヤケ）とあるのは、谷川士清の通

證には、多摩郡の事であらうかと疑つてゐる。氷は末の譌であるかも知れぬ。タバをタマと云ふよりして、後には玉の字を當てゝ、其の名を美にするやうになつたものと思ふ。高田與清の多摩川考（温知叢書所收）には、參考に供すべき說が尠くない。

二　文學に現れた多摩川

萬葉集

多摩川の文學に入つたものは、前にも掲げた萬葉集の東歌を最も古いとする。

多麻河泊爾。左良須氐豆久利。佐良左良爾。奈仁曾許能兒乃。己許太可奈之伎。

調布

てづくりは調布である。和名類聚抄に、唐式云。白絲布。今按。俗用二手作ノ布ノ三字一。

云二天都久利乃一沼乃一。是乎。」とある。同書に阿佐沼乃(アサヌノ)と訓してゐる紵布の紵の字を、新撰字鏡には弖豆久利と訓してゐる。多摩川附近に調布といふ地名の存するのは、全く此の歌に因んだのである。僧顯昭の袖中抄第十五に、右の歌を解說した中に、「これは武藏國に兒玉鄕と云所よりながれ出たる川を玉川とは云也。」とあるのは、玉の字を解釋しようとして、牽强の說を述べたもので、明に誤謬である。

拾遺集

拾遺和歌集卷十四戀四に、讀人知らず、

玉川にさらすてづくりさら〳〵に昔の人のこひしきやなぞ

とあるのは、萬葉の歌に據つたのである。

内裏名所百首

内裏名所百首(建保三年)には、雜部に玉河里の題詠がある。但、此は必ずしも國を定めてゐない。次節に云ふ如く、玉川は武藏の外に數



多摩川（江戸名所圖繪所載）

々存するからである。今其の十二首中、調布を詠んでゐるので、武藏の玉川であると思はれるのは、左のやうである。

近世人の和歌
加藤千蔭

てつくりやさらすかきねの朝露をつらぬきとめぬ玉河の里（夫木抄には「つらぬきとむる」とある。）　定家

たま河にさらす手つくりさらによにたのむ日影のあはれ過ぎ行く　家隆

次に近世人の和歌には、左のやうなのがある。加藤千蔭のうけらが花に、

月照河水

むさしねに雲をさまりてさゞれ石も月にみがける玉川の水

月前眺望

玉川や千むらいほむら手つくりをさらしそふると見ゆる月かな

作者の尙古趣味が能く窺はれる。

村田春卿

村田春鄕家集に、

春の始の歌とて人々と共によめる

白玉の、たまの横山、駒並べて、今日こえ來れば、霞立つ、野の邊はるけし、氷とく、川とほ白し、かぎろひの、春日おもしろく、てれる玉川。

此は短篇ながら興味がある。

高田與清

高田與清の松屋棟梁集に、

玉川兩岸百首の中に、

關戸川

年月は流るゝ水の關戸川せきとむべくもなき世なりけり

登戸

さしよする舟よりおりてのぼり戸の堤にしばし月を見るかな

此の題材は、隅田川兩岸一覽の如き思ひつきである。

三條實美

三條實美の梨のかた枝に、

多摩川にてえたる鮎を高崎正風ぬしにおくるとてよみてそへたる

暇ありて遊びくらしゝ玉川のつりにかゝれる幸にぞありける

對鷗莊の詠と共に、是も亦風雅な貴紳を偲ばしめるものである。

俳諧

俳諧の方面では、次のやうなのがある。

玉川に遊ぶ

玉川や光る瀨の秋鮎の秋　一　兆

調布の㣔白し瀨々の秋　蓼　太

分梅村にて

里人よ秋の夜語れ太平記　同

狂歌では、狂歌江戶砂子集に、玉川

玉川の賤が手わざもむつまじや女波男波は布にうたせて　春日亭長人

遠目から流るゝさまもいつたんのさらせる布と見ゆる玉河　一寸法師

同書續編に、同題

玉川やさらせる布も行水もみな大江戶の仕入なるらん

二喜

武藏野の萩の雫や落ちそはん紫そむる玉川のさと　捨魚

末廣に猶もあふげる大江戸の水の要や玉川の里　八百齋

などを認める。やはり古い歌の趣味に基づいたものである。

轉じて文章の方面では、淺井了意の東海道名所記に、六郷橋の記事がある

東海道名所記
六郷橋

六郷の橋、ながさ百廿間なり。橋のつめを右のかたへ池上へゆく道あり。道の左の方半里ばかりに、獵師のすむ里あり、羽田村といふ。六郷の川上には大なる鮎あり。橋の上より西のかたに大山みゆ、其道一日路有といふ。

但し此の橋が元祿元年七月洪水で流された後、渡船となつたといふ趣

は、成島司直の「みるめのさち」や小笠原長保の甲申旅日記などに見えてゐる。山崎美成編の疑問録にも、諸説が出てゐる。

神靈矢口渡

平賀鳩溪（源内）の神靈矢口渡が、背景を多摩川畔に採つてゐることは、最も有名である。

太田南畝の文

又太田南畝の明和四年の秋の遊二玉川一記は、載せて三餐餘興にある。同じ人の文化五年から六年にかけて玉川の邊を經廻つた日記もあつて、それは調布日記と題する。共に蜀山人全集に收められてゐる。

成島司直の紀行

それから成島司直の天保三年八月の玉川紀行（輪池叢書所收）も注目すべきものである。卽ち

さらす調布さら〳〵になど聞えし玉川の源は、信濃の國いさるが嶽といへる山よりいでゝ、はる〴〵と、甲斐が根をめぐり、この武藏野をへて、末は東の海にいりぬるこそ、そのはじめは觴をあ

らふとかいへるたぐひなるべし。楢の葉の名におふ宮のふることよりして、九重の雲井の庭にも聲えあげて、世々の先達も詞の光みがきたる名所なれば、月雪花の折にふれ、とひ見んの本意はありながら、難波の蘆のさはり多き習ひにて、關の名の霞の外に思ひくし過しけるを、ことし秋の暑もやゝうすらぎ、初雁がねもまたるゝころ、西の御所〔編者云、世子家慶の事である。〕かしこに逍遙し給ふ御あらましありと聞ゆ。こは享保寶暦のころならせ給ひし後は、久しくわたらせ給ふ事も有ざりしを、これも絶たるをつぎ、廢れたるを興させたまふ御政の一なるべし。やつがれものどめあへず。安房守〔内藤〕忠明につきて大殿の御かたへこの御供つかうまつらはまほしとねぎまゐらせしに、御道すがらの事書しるし奉るべしとの仰言下りぬ。

せばき袖にはつゝみ兼ぬるかしこさにて、浮木の龜の日影見し心地せらるゝもあまりなりや。

と書き出して、文を續けてゐる。尚、二子（フタゴ）に於ける鮎漁の條を抽き出して置かう。

川顏には網引する船數々あり。こなたの岸には小鷹丸といへる御船をつなぎたるが、すべて朱もてよそひたる御船の錦の纜、金銀の具など口にかゞやき、あてにうるはし。また川倉といふをはじめ、袋網、瀨干簗など、日路のかぎりに河面に設て、鮎とるわざのかぎりをつくしたり。このあたりの勝槩は、高妙のうつし繪も及びがたかるべし。河原の間に水のながれありて、鮎あまたはしるを、君をはじめ御かたはらの人々左手もてすくふ。わかきどち

はからうじてすくひ得し魚を、けにいるゝとて取放し、それをひろはんとてあたりまよふさまも興あり。鮎はかずくの籠にこちたくもてつゞけたり。かくてかの小鷹丸にめさる。淺瀨なれば、御舟さしどもは、川におりたちて、御船をひく。漁夫等は船にのり、網引して見そなはし奉る。鵜飼等は兼て川洲の末の方に、うづくまりゐたる、この時みな御舟の前に來り、水に入て鵜つかふ樣またためづらし。寛永の頃は角太河にて鵜船御覽の事、ものに見え侍れど、今はかのあたりにはたえてみぬ事なれば、たれもくめで興ず。かくて御舟より河原におり給ひ、袋網、瀨干などいふを御覽じて、河原に設けたる幔引めぐらしたるかたにやすらはせ給ふほど、吾もそのかげにかくれて、川顏のながめあかず覺えし

がまゝに、

調布の昔はとほきふることもけふぞくみしる玉川の水

かへるさはよし遠しとも玉川の鵜飼の手縄くるゝまでみむ

そのかみ豪奢を極めた遊輿の狀が、精彩のある筆づかひで、今も能く偲ばれる。

三　六玉川

六玉川

武藏の多摩川を叙し來つて、勢、他の玉川に想到しないわけに行かぬ。以下證歌に據つて、一わたり記さうと思ふ。

攝津

攝津のは玉川の里と詠じてゐる。和漢三才圖會に、今云西面村（サイメン）自二茨木村一二十八町東とあるもので、萬葉集に三島江の玉江と出てゐるのも此處であると云ふ。後拾遺和歌集

第三夏、

正子內親王の繪合し侍りけるにかねのさうじにかき侍りける

相　模

見渡せば浪のしがらみかけてけり卯の花さける玉川の里

千載和歌集卷五秋下、源俊賴朝臣

松風の音だに秋はさびしきに衣うつなり玉川のさと

此のやうに卯の花や擣衣を詠んでゐる。

高野

高野の玉川は、風雅和歌集卷十六雜中に、

高野の奥の院へ參る道に玉川と云ふ河の水上に毒蟲の多かりければ此の流を飮むまじき由を示し置きて後よみ侍りける

弘　法　大　師

忘れても汲みやしつらむ旅人の高野の奥の玉川の水

とあるのに基づいて毒水を云ふのである。實は大師の此の詠に就いては、疑ふべき點がある。此の水に毒が有るとの謂はれに就いて、紀伊續風土記に四説を擧げてゐるが、大和本草の説のやうに、水上に砒石があつて、毒水が流れたのであらうと云ふのを、當つてゐるとしたらよからうか。

山城

山城のは井手の玉川と云ふ。即ち井堤河の事である。新古今和歌集卷二春下、皇太后宮大夫俊成

駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉川

といふ優雅な詠が傳つてゐる。此は山吹を詠み込んだのである。一體綴喜郡井堤は井堤左大臣即ち橘諸兄の館のあつた所である。諸兄は井

堤寺を造つて、金堂四面の廻廊のまはりに、山吹を植ゑたといふ話で、其の故であらうか、井堤の山吹は夙く紀貫之や壬生忠見などの歌に入つてゐる。

陸奥のは野田の玉川と云つて、千鳥を配してゐる。新古今和歌集卷六冬、

みちのくににまかりける時よみ侍りける　能因法師

夕されば汐風こしてみちのくの野田の玉川千鳥なくなり

續古今和歌集卷六冬、順徳院御歌

みちのくの野田の玉河みわたせば潮風こしてこほる月影

奥羽觀跡聞老志の宮城郡の條に、「野田玉川在ニ鹽釜村以南一。往昔有ニ河流一。潮汐亦來往。石瀬所浮光躍レ金。深潭地淸影沈レ璧　皆爲レ月得ニ嘉

名一。如今爲二廢地一。而唯遺二野田之溝渠一耳。或曰南部領九戸部亦有二同名者一。」と見えてゐる。又磐城にも之を附會してゐる所がある。

近江

近江のは野路の玉川と稱する。栗太郡に野路がある。野路は玉野路であらうと云ふ。玉野の原といふのもある。此の地は今、老上村と名づける。こゝの玉川を老上川とも云ふ。千載和歌集卷四秋上、

權中納言俊忠の桂の家にて水上月といへる心をよみ侍りける

源俊頼朝臣

あすもこむ野路の玉川萩こえて色なる浪に月やどりけり

夫木和歌抄卷十四、家隆卿

鶉なく野路の玉川けふみれば萩こす波に秋風ぞふく

此のやうに萩を配合するのである。

以上の五つに、手づくりの玉川を併せて六玉川と云ふ。玉川と稱する河流は尙、駿河や相模や常陸や羽前などにもあるけれども、以上の六つを顯著とするのは、全く古歌の力であると思ふ。

本朝文鑑(享保二年刊)に僧丈草の六玉川前賛、向去來の六玉川後賛を載せ、又別に山口素堂の六玉川の跋も出てゐる。此等は皆伊丹の住百丸の六玉川に關する詩歌集に記した文章である。去來のだけこゝに示して置かう。

六玉川後賛　　　向去來

田中の山本といへる所おほく、松村、四日市の名もすくなからねば、玉川の數も六つには限るまじきを、唯もてはやす人のめでたければ、その名の共に聞ゆならん。されば人は所によりてなつか

しく、所は人をまちてあらはるべし。然るを玉とよべる名の故あり、我公百丸子は、是を知りたまふや。先よ井手の玉川は、殊に山吹咲亂れて、花には黄玉、葉には青玉と、置きそふ露の玉川なり。次は卯の花垣の白妙に見えて、小夜ふけがたの時鳥の、蜀の國より津の國まで、鳴て飛來れる玉川なり。三に武藏野の玉川は、さらす調布のさら〳〵と、流れ給へる砂玉川なり。野路の玉川は外のけしきにひきかへ、萩の錦に波越えて、色ある月の玉川なり。その五は川の淺瀨も見えず、夕潮の千鳥も、共に吹上げられて、風に騷げる水玉川なり。終は名にし高野の奥にて、旅人のもし忘れても汲や侍らんかと、大師のあはれみ給ひける衣のうらの玉川なり。もしや人ありて、我が言のたしかならずといはゞ、玉に卞

和が足をきられて、跛ひきるためしとも見るべし。

志賀忍の理齋隨筆(天保八年刊)を見ると、其の六冊に、卷頭各々六玉川の繪を配してゐるのは、其の好尙が想察せられる。葛飾北齋の玉川六景の屛風は、彼が七十四歲の時の作で、名品として今に傳つてゐる〔近世繪畫史に據る。〕彼の大雜書に源氏五十四帖の畫と共に、六玉川の景を錄して、婦女童幼の翫賞に供したのは、今も記憶してゐる人が多いであらう。

千種有功の詠

千種有功の千々廼屋集に、六所玉川の詠のあるのは面白い。

山城

駒なべていざ見にゆかむ蛙なく井手の川べの山吹の花

攝津

卯の花のさきそめしより白波のよるこそなけれ玉川の里

近江

秋萩の花の影さへにほふなりぬれて渡らん野路の玉川

陸奥

みちのくの野田の玉川たまにきて汲まむとすれば千鳥なくなり

武藏

たま川の里の松風さえ〳〵て夜は月をもさらすなりけり

紀伊

高野山みづのこゝろはしらねども玉といふ名のきよげなるかな

俗曲

俗曲では、長唄の玉川も琴唄の玉川も皆六玉川を謠つてゐる。さうして古歌の趣致を蹈襲してゐるのである。

長唄の玉川〔琴唄としても使用する。〕

山城の、井出や見ましと駒とめて、なほ水かはん山吹の、花の露そふ春もくれ、夏來にけらし見渡せば、波のしがらみかけてけり、卯の花咲ける津の國の、里に月日を送るまに、いつしか秋に近江なる、野路には人のあすもこん。今をさかりの萩こえて、色なる波にやどりにし、月のみそらの冬ふかみ、雪げもよほす夕されば、汐風こしてみちのくの、野田に千鳥の聲さびし、ゆかし名たゝるむさし野に、さらす、さらすてつくりさら〳〵に、昔の人のこひしさも、いまはたそひて紀の國の、氣の毒なるは忘れても、くみやしつらん旅人の、高野(タカノ)のおくの水までも、名に流れたる六つの玉河。〔日本歌謠類聚に據る。坊間に行はれるものには文句の異同がある。〕

琴唄の玉川

其一

いはで思ふ、心の色を八重にしも、うつしそむてふつれなさに、
春の月毛の駒とめて、いざ水かはん山吹。

其二

おのが秋とや小男鹿の、しがらむ花の摺衣、うつろふ波も紫に、
亂れそめにし白露。

其三

川門（カハト）につたふ松風の、音だに秋はさびしきに、ころもうつ木の垣
もれて、砧もいとゞいそぐなり。

其四

きのふの袖もほしやらで、まだきぬれそふ朝露に、波も光をうちよせて、さらすや賤が手づくり。

其五

汐風こして夜もすがら、月にみがける川浪も、くだけて物をおもひねの、夢をさそひて啼く千鳥。

其六

とかへる鷹の山深み、鹿は嵐のこがらしに、流るゝ水の名のみして、氷もむすぶばかりなり。

布晒（宇治川又は野路の玉川としてゐるものがある。）の所作が舞踊に行はれることも亦世人の熟知する所である。さうして近世邦樂年表に據ると、文化十四年三月には、六玉川秀歌姿見といふ所作事が、長

唄、清元、新内の出し物で上場せられてゐるのは、注目すべきことである。此う見て來ると、文藝上に於ける玉川の趣味は、決して些少ではないのである。

武藏野とその文學　終

跋

最早一昔、大正六年の春のこと、予は時の東京府知事井上法學博士の慫慂を受けたのが動機で、武藏野に關する古來の歌謠や文章を蒐集し、解說を加へて、武藏野の文學と題する一書を編み、其の年九月硏文社をして出版せしめた。同書の緖言に記して置いた編纂の趣旨は左の通である。

古來の文學を探究して、所謂名所が和歌文の上に如何に顯れ、代々の人々に如何に認められたるかを知るは、一は地理景物の變遷を攷ふる資たると共に、又一は國民趣味の傳來を詳にする所以なり。而して之を以て古人の雅懷を追想すべく、且後昆を啓發すべきものあ

り。吾人一度思を古の武藏野に致さむか、武藏野の一語、直に念頭無限の興味を生じ來るにあらずや。是實に古文學に聯想を及すを以てなり。今主として純國文學上より（漢詩漢文の方面は如く之を措く。）武藏野を觀むとす。而して加ふるに隅田、多摩二流の事を以てせり。

さうして其の書を公にするに當つて、井上知事は高序を冠らせて、編述の來由を明にせられ、吉田（東伍）文學博士も亦序文を寄せられた。加之德川（賴倫）侯爵は題辭を贈られた。此うして出來た小著は、同年十一月東京府から畏きあたりへ獻上せられ、爲に予は至大な光榮を得たのであつた。想へば井上博士と吉田博士とは其の後程無く相前後して逝去せられ、德川侯爵も近年溘焉として世を辭されたのである。予は此の小著を

手にする毎に、感慨無量、追念の涙滂沱にるものがある。

處が其書は絶版となつて久しく、ために此の頃では、再版を出すやうに、勸められることが二三に止らなくなつた。豫て武藏野書院主の前田君からも新修覆刻を再三促され、深町君も快く承諾された結果、前田君の手で改めて出版するやうになつた。前田君は武藏野の研究者である。予の小著もこゝに適當の人を得たのは喜ばしい。偖愈ゝ新に上梓するについては、大體の結構は元通であるけれども、多分に增補改訂を施したから、新版同樣の面目となつたのである。

昭和二年五月中旬　　　野　村　八　良

同じ著者によりて

◇能狂言の研究　大正五年　光風館
◇謠曲名作選　大正十四年　明治書院
◇増補鎌倉時代文學新論　大正十五年　明治書院
◇國文學研究史　大正十五年　原廣書店

昭和二年五月十七日印刷
昭和二年五月二十日發行

武藏野とその文學　定價金一円七十錢

編者　野村八良

東京市小石川高田豊川町四三番地
發行兼印刷者　前田信

東京市牛込區鶴巻町三〇六番地
印刷所　武藏野書院印刷部

東京市小石川目白臺
發行所　武藏野書院
振替東京六七一四六番



